
埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第103集

森下遺跡(第2次)

2009.1

深谷市教育委員会

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第103集

もりした いせき
森下遺跡(第2次)

2009.1

深谷市教育委員会



調査区全景（合成写真）

巻頭図版2



調査区東半遠景



第1号竪穴建物跡



第5号豎穴建物跡



第1号溝

卷頭図版4



第1号埴輪棺墓(1)



第1号埴輪棺墓(2)

序

このたび、深谷市教育委員会では、「森下遺跡（第2次）」の発掘調査報告書を刊行するはこびとなりました。

森下遺跡の今回の調査では、古墳時代から平安時代までの遺構が多数確認されています。主な遺構は、古墳時代前～中期の住居跡、古墳時代後期の古墳跡、平安時代以降の溝跡と多岐にわたり、時代によって異なった土地利用がされていたことを窺い知ることができます。

現在、深谷市には縄文時代から近現代までの様々な遺跡が残されています。こうした遺跡は、一度消滅すると二度と見ることでできないものであり、これを保護し、後世に伝えていくことは私たちの大きな課題です。今回の発掘調査の成果を報告書というかたちにまとめ、広く市民の皆様にご紹介することで、郷土の歴史の古さやその優れた文化について、ご理解を深めていただきたいと存じます。また、この報告書が学術研究はもとより、学校、社会教育などの生涯学習活動を通じて、皆様が歴史を考えるための資料として役立てば、望外の喜びです。

最後に、今回の発掘調査および報告書作成にあたり深いご理解とご協力をいただきました関係者の皆様に心から感謝を申し上げまして序にかえます。

平成 21 年 1 月

深谷市教育委員会

教育長 猪野 幸男

例 言

1. 本書は、埼玉県深谷市上敷免字森下 1053 番 1 における集落排水処理施設建設工事に伴う遺跡発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、深谷市教育委員会が主体となり、調査費用は、農家負担分については国庫補助対応、その他については深谷市が負担した。
3. 発掘調査期間は、平成 19 年 9 月 18 日～12 月 26 日である。
4. 発掘調査は知久裕昭、幾島審が担当した。整理作業及び報告書の執筆は知久が担当した。
5. 遺跡の基準点測量及び遺構測量は、東京航業研究所に委託した。
6. 出土遺物は、深谷市教育委員会が保管している。
7. 発掘調査および報告書の作成にあたっては、次の諸氏から数々のご指導ご助言を賜った。
青木克尚 竹野谷俊夫 栗岡 潤 瀧瀬芳之 富田和夫 中村倉司 松田 哲
村松 篤 (敬称略)

凡 例

1. 遺跡原点は、国家方眼座標 $X = 23300.000$ 、 $Y = -48600.000$ である。また、各遺構図における方位指示は、全て座標北を示している。
2. 遺物観察表の記載は、以下のとおりである。
 - ・計測値の単位は cm である。
 - ・器径、器高で () を付したものは推定値を表す。
 - ・胎土は、肉眼で確認できた範囲での含有物を、以下のアルファベットで表した。
A…白色粒子、B…赤色粒子、C…黒色粒子、D…石英、E…角閃石、F…片岩
G…白色針状物質、H…砂礫、I…雲母
3. 遺物の注記、および原図における遺構の略号は、次のとおりである。
竪穴建物跡…S J、特殊遺構…S X、古墳跡…S T、埴輪棺墓…S H、土坑…S K、溝…S D
4. 遺構・遺物実測図の縮尺は、適宜スケールで示した。

発掘調査の組織

発掘調査(平成19年度)

調査主体者	深谷市教育委員会	教育長	猪野 幸男
		教育次長	石田 文雄
		次 長	中村 信雄
事務局	深谷市教育委員会生涯学習課	課 長	澤出 晃越
		主幹兼課長補佐	武井 茂
		文化財保護係長	古池 晋禄
		主 査	森下昌市郎
		主 査	鳥羽 政之
		主 査	高村 敏則
		主 任	荻野 直美
		主 任	知久 裕昭
		主事補	幾島 審
		臨時職員	栗原貴世実

報告書刊行(平成20年度)

調査主体者	深谷市教育委員会	教育長	猪野 幸男
		教育次長	石田 文雄
		次 長	中村 信雄
事務局	深谷市教育委員会生涯学習課	課 長	澤出 晃越
		課長補佐	吉場 厚仁
		文化財保護係長	鳥羽 政之
		主 査	森下昌市郎
		主 査	宮本 直樹
		主 任	荻野 直美
		主 任	知久 裕昭
		主 事	幾島 審
		臨時職員	栗原貴世実

調査参加者

阿部ルリ子	伊藤 昌	市川喜和子	江原佳与子	大木 良子	大澤 大美	大島 周子
小野寺和子	笠原 淑江	島崎 祐子	関口由美子	滝田 悦子	田代さち子	田中香代子
富田もえみ	根岸 紀次	浜野 光子	丸山 和枝	横山 明美	除村 敦子	吉野九の枝
吉野真由美	吉野みゆき					

目 次

序

例言

発掘調査の組織

I	発掘調査に至る経過	1
1	発掘調査に至る経過	1
2	発掘調査の経過	1
II	深谷市の地理的環境と周辺遺跡の様相	2
III	遺構と遺物	7
1	概要	7
2	竪穴建物跡	8
3	特殊遺構	18
4	古墳跡	24
5	埴輪棺墓	24
6	溝	34
7	土坑	35
8	河川跡	43
IV	調査のまとめ	44
付編1	放射性炭素年代測定	45
付編2	自然木・炭化材樹種同定	47

報告書抄録

挿図目次

第1図	森下遺跡及び周辺の遺跡分布図	3	第21図	第1号古墳跡	25
第2図	森下遺跡の位置と発掘調査区	4	第22図	第1号古墳跡出土遺物	26
第3図	森下遺跡第2次調査区全体測量図(1)	5	第23図	第2号古墳跡	27
第4図	森下遺跡第2次調査区全体測量図(2)	6	第24図	第2号古墳跡遺物出土状況(1)	29
第5図	森下遺跡全体図	7	第25図	第2号古墳跡遺物出土状況(2)	30
第6図	第1号竪穴建物跡	9	第26図	第2号古墳跡出土遺物(1)	31
第7図	第1号竪穴建物跡出土遺物(1)	11	第27図	第2号古墳跡出土遺物(2)	32
第8図	第1号竪穴建物跡出土遺物(2)	12	第28図	第1号埴輪棺墓	33
第9図	第2・3号竪穴建物跡	13	第29図	第1号埴輪棺墓出土遺物(1)	34
第10図	第2号竪穴建物跡出土遺物	15	第30図	第1号埴輪棺墓出土遺物(2)	35
第11図	第3号竪穴建物跡出土遺物	15	第31図	第1号溝	36
第12図	第4号竪穴建物跡、第8号土坑	17	第32図	第3～5号溝	37
第13図	第4号竪穴建物跡出土遺物	18	第33図	第2号溝	38
第14図	第5号竪穴建物跡	19	第34図	第1・2号溝出土遺物	38
第15図	第5号竪穴建物跡遺物出土状況	20	第35図	土坑実測図(1)	39
第16図	第5号竪穴建物跡出土遺物(1)	21	第36図	土坑実測図(2)	40
第17図	第5号竪穴建物跡出土遺物(2)	22	第37図	土坑出土遺物	41
第18図	第6号竪穴建物跡	22	第38図	河川跡	42
第19図	第6号竪穴建物跡出土遺物	22	第39図	ピット出土遺物	43
第20図	第7号竪穴建物跡、第1号特殊遺構	23			

表目次

第1表	森下遺跡及び周辺の遺跡一覧表	3	第8表	第6号竪穴建物跡出土遺物観察表	23
第2表	第1号竪穴建物跡出土遺物観察表	16	第9表	第1号古墳跡出土遺物観察表	26
第3表	第2号竪穴建物跡出土遺物観察表	16	第10表	第2号古墳跡出土遺物観察表(1)	26
第4表	第3号竪穴建物跡出土遺物観察表	16	第11表	第2号古墳跡出土遺物観察表(2)	32
第5表	第4号竪穴建物跡出土遺物観察表	18	第12表	第1・2号溝出土遺物観察表	38
第6表	第5号竪穴建物跡出土遺物観察表(1)	19	第13表	土坑出土遺物観察表	41
第7表	第5号竪穴建物跡出土遺物観察表(2)	20	第14表	ピット出土遺物観察表	43

図版目次

- 巻頭図版1 調査区全景(合成写真)
- 巻頭図版2 調査区東半遠景 第1号竪穴建物跡
- 巻頭図版3 第5号竪穴建物跡 第1号溝
- 巻頭図版4 第1号埴輪棺墓(1) 第1号埴輪棺墓(2)
- 図版1 調査区西半 調査区東半 第1号竪穴建物跡(1) 第1号竪穴建物跡(2) 第1号竪穴建物跡(3)
第1号竪穴建物跡遺物出土状況 第1号竪穴建物跡炉跡 調査風景
- 図版2 第2号竪穴建物跡 第2号竪穴建物跡遺物出土状況(1) 第2号竪穴建物跡遺物出土状況(2)
第2号竪穴建物跡P1遺物出土状況 第3号竪穴建物跡 第4号竪穴建物跡
第4号竪穴建物跡遺物出土状況(1) 第4号竪穴建物跡遺物出土状況(2)
- 図版3 第5・6号竪穴建物跡 第5号竪穴建物跡 第5号竪穴建物跡遺物出土状況(1)
第5号竪穴建物跡遺物出土状況(2) 第5号竪穴建物跡遺物出土状況(3)
第5号竪穴建物跡遺物出土状況(4) 第6号竪穴建物跡 第7号竪穴建物跡、第1号特殊遺構
- 図版4 第1号古墳跡(1) 第1号古墳跡(2) 第2号古墳跡 第2号古墳跡遺物出土状況(1)
第2号古墳跡遺物出土状況(2) 第2号古墳跡遺物出土状況(3) 第1号埴輪棺墓(1)
第1号埴輪棺墓(2)
- 図版5 第1号溝 第1号溝土層断面(1) 第1号溝土層断面(2) 道路拡幅部トレンチ 第2号溝
第1号土坑 第2号土坑 第3号土坑
- 図版6 第4号土坑 第5号土坑 第6号土坑 第7号土坑 第8号土坑 第9号土坑 第10号土坑
流木出土状況
- 図版7 第7図1(SJ1) 第7図2(SJ1) 第7図4(SJ1) 第7図5(SJ1)
第7図6(SJ1) 第7図8(SJ1) 第7図11(SJ1) 第7図12上半(SJ1)
第7図12下半(SJ1) 第7図13(SJ1)
- 図版8 第8図14(SJ1) 第8図15(SJ1) 第8図29(SJ1) 第8図30(SJ1)
第10図1(SJ2) 第13図1(SJ4) 第13図2(SJ4) 第13図3(SJ4)
第13図4(SJ4) 第13図5(SJ4)
- 図版9 第13図7(SJ4) 第16図3(SJ5) 第16図6(SJ5) 第16図7(SJ5)
第16図9(SJ5) 第16図10(SJ5) 第16図11(SJ5) 第16図12(SJ5)
第16図13(SJ5)
- 図版10 第17図14(SJ5) 第17図15(SJ5) 第17図16(SJ5)
管玉(SJ2)、勾玉・石製模造品(SJ5) 第1号古墳跡出土埴輪 第26図1(ST2)
第26図3(ST2) 第26図4(ST2) 第26図5(ST2) 第26図7(ST2)
第26図10(ST2) 第26図11(ST2) 第26図15(ST2)
- 図版11 第26図16(ST2) 第26図17(ST2) 第26図18(ST2) 第26図19(ST2)
第26図20(ST2) 第26図21(ST2) 第26図22(ST2) 第26図23(ST2)
第26図24(ST2) 第26図25(ST2) 第26図26(ST2) 第27図31(ST2)
第27図34(ST2) 第34図6(SD2)

図版12 第27図28(S T 2) 第29図1(S H 1) 第29図2(S H 1) 第30図3(S H 1)
第37図8(S K 9) 第39図1(ビット) 第39図2(ビット) 第39図4(ビット)

I 発掘調査に至る経過

1 発掘調査に至る経過

深谷市は、埼玉県北部に位置し、北を群馬県との境に接する。平成18年1月1日に旧岡部町、旧川本町、旧花園町と合併し、総面積137.58km²、人口約146,500人となった。当地は農業、工業ともに盛んで、深谷ネギの産地としても有名である。歴史的にも、後期旧石器・縄文・弥生・古墳時代を始め、幡羅郡家や榛沢郡家が造られそれぞれ郡の中心として機能していた奈良・平安時代、また百済木遺跡で豪族が居宅を営んだ奈良時代、深谷上杉氏の拠点であった室町・戦国時代、宿場町として栄えた江戸時代、そして近・現代まで多くの遺跡、文化財が残される。鎌倉時代の有力御家人であった畠山重忠の本拠地として、或いは近代日本経済界を築いた渋沢栄一の生地としても良く知られる。

森下遺跡は、JR深谷駅より北へ約2.4km、妻沼低地に立地する。標高は約34m、遺跡の範囲は約83,000m²と推定される。これまでに埼玉県埋蔵文化財調査事業団と深谷市によって一度ずつ調査が行なわれている。その結果から、遺跡中央の窪地を挟み、集落跡が遺跡の東西両端に位置することが確認されている。また、その周囲からは溝等が確認され、水田跡が広がることが推定される。そのため、深谷市教育委員会では、森下遺跡周辺で事前調査等を行ってきた。

平成18年5月26日、森下遺跡地内の深谷市上敷免字森下1053番1で集落排水処理施設建設工事の実施が明らかとなった。深谷市教育委員会は工事担当部局である深谷市建設部集落排水課との協議を経て、平成18年10月31日～11月1日に当該地の確認調査を実施した。調査の結果、竪穴建物跡、溝、土坑等の遺構や土師器が多数確認された。この結果を踏まえ、発掘調査の実施について、市教育委員会と市集落排水課とで協議を行い、工事予定地のほぼ全域について、市教育委員会が主体となって発掘調査を実施することで合意した。

市教育委員会は直ちに、文化財保護法第99条の規定に基づき、埋蔵文化財発掘調査通知（平成19年7月30日付深教生発第425号）を提出し、準備に入った。

2 発掘調査の経過

集落排水処理施設建設工事に伴う、森下遺跡第2次発掘調査は、平成19年度秋から冬にかけて行なわれた。

9月下旬～10月上旬にかけて準備及び表土剥ぎを遺構確認と併せて行い、10月中旬より遺構の掘り下げを開始した。近代において土取りがされたためか、確認面からの深さは非常に浅く、約30cmを測る。土壌は黄褐色の粘質土と砂質土で、粘質土は乾くと非常に硬く、移植ゴテが何本か曲がってしまう程であった。

調査は東半部を先行して行い、終了後に埋め戻し、西半部及び道路拡幅部の調査を行なった。東半部は11月下旬に終了し、その後、12月下旬にかけて西半部及び道路拡幅部の調査を行なった。埋め戻しは1月上旬に完了した。

調査面積は約1,900m²であり、7棟の竪穴建物跡や2基の古墳跡、1基の埴輪棺墓等の遺構が多数検出された。他にも、竪穴建物を掘削途中で放棄されたとみられる特殊遺構もある。その後の段階には古墳が築造されており、集落域から墓域への変遷が推測される。

また、調査終了後の工事中、現地表面下約5mの深さから流木が確認された旨、施工業者からの連絡を受け、試料の採集を行なった。年代分析を行なったところ、縄文時代のものと判明し、地形の変化を考える上で貴重な情報となった。

今回の発掘調査を行うにあたり、深いご理解とご協力をいただいた方々をはじめ、この文化遺産を記録保存し、後世に伝える作業のためにご協力いただいた全ての方々に敬意を表する。

II 深谷市の地理的環境と周辺遺跡の様相

深谷市の地形を概観すると、東西に走るJR高崎線付近を境として、南側に櫛挽台地が広がり北側には妻沼低地が形成されている。櫛挽台地は荒川によって作られた古い扇状地が浸食されてできた沖積台地で、寄居付近を頂部としている。妻沼低地は、利根川の自然堤防及び沖積低地であり、加須低地と並び利根川の中流低地の一つに数えられる。

櫛挽台地は構造的には、北西側の武蔵野面に比定される櫛挽面（櫛挽段丘）と、南東側の立川面に比定される寄居面（御稜威ヶ原段丘）とで段丘状に形成されている。櫛挽面はほぼJR高崎線沿いの崖線で比高差5～10mをもって妻沼低地と接しているが、寄居面は高崎線より北へ1.5～1.8kmほど延びていて、比高差2～5mをもって妻沼低地と接している。接線付近での標高は櫛挽面が40～50m、寄居面が32～36m、妻沼低地が30～31mである。櫛挽面は標高70m付近より発する上唐沢川、押切川、戸田川、唐沢川等が北流していて、櫛挽面北端部は南北に台地を開析する浅い谷が発達したものと考えられる。発掘調査で埋没谷が検出されることも多い。また、先端部には所謂先端湧水と認められる池等もある。寄居面にはこうした谷筋はほとんど認められず、妻沼低地と接する台地先端部を除き、水利上は生活に不向きだったと考えられる。

妻沼低地は、利根川右岸に広がる肥沃な低地である。南は熊谷市付近を境として秩父山塊に連なる丘陵や台地と大宮台地に挟まれた荒川低地に続き、東は加須低地に接する。妻沼低地の南端に櫛挽面、東に寄居面を控える一角に深谷市の中心部があり、周辺では住宅地が増加している。妻沼低地は現在ではかなり平坦であるが、利根川の氾濫や流路の変遷等により、自然堤防が発達したものと考えられる。

深谷市内で確認されている旧石器時代の遺跡は多くはないが、荒川右岸の江南台地上には、細石刃や彫刻刀形石器が出土した白草遺跡等がある。旧深谷市域で

は旧石器はほとんど出土しておらず、西大沼の花小路遺跡と東方の幡羅遺跡の2点のみである。

縄文時代では、台地の先端部に当たる東方城跡で草創期の可能性がある尖頭器が出土している。また、上野台の小台遺跡からは、早期押型文土器や前期黒浜式土器、諸磯式土器の破片が出土している。上野台の割山遺跡からも、諸磯a式土器が多く出土する。

縄文中期、特に後半になると遺跡数やその規模は増大する。小台遺跡は、多量の土器や石器を包含する埋没谷を中心に住居や土坑群が展開する。遺構は中期中葉～後期前葉までのものがこれまでに検出されている。小台遺跡と時期的に重なる遺跡は数多く、小河川を挟んで小集落が多数分布していたか、集落が移動していたものと思われる。

縄文後・晩期になると、生活域の中心は櫛挽台地から妻沼低地へと移っていく。上敷免遺跡では、包含層から在地の後・晩期の資料に混じり、東海系条痕文土器が検出されたり、埼玉県では初の遠賀川系の壺が検出されるなど、他地域との交流を考えさせられる。

弥生時代に入ると、上敷免遺跡で中期の再葬墓と、住居跡が確認されている。また、上敷免森下遺跡で中期の再葬墓、宮ヶ谷戸遺跡で中期の住居跡が確認されている。岡の四十坂遺跡も該期の代表的な遺跡である。

古墳時代前・中期の集落は、森下遺跡や下手計西浦遺跡、皿沼西遺跡等で確認されており、当該地での調査例が増加しつつある。

古墳時代後期前半になると遺跡数は爆発的に増加し、妻沼低地の自然堤防上に大規模な集落が営まれる。この時期に小規模な円墳が数多く造られるようになり、櫛挽台地の先端部に形成される木の本古墳群や白山古墳群等の古墳群が形成される。

7世紀頃には上敷免遺跡等それまでの大集落は縮小傾向になり、代わって宮ヶ谷戸遺跡や東川端遺跡、清水上遺跡等、幡羅郡家と推定される幡羅遺跡に近い位



第1図 森下遺跡及び周辺の遺跡分布図 (1/20,000)

遺跡名称	時 代	遺跡名称	時 代
森下	古墳前期～平安	深谷城跡	古墳前期、平安、中世、近世
矢島南	古墳後期～平安	仲町	縄文後期
起会	古墳中・後期～平安	侍町	中世
堀東	縄文中期・後期、弥生前期・中期、平安	城西	縄文前期・中期、古墳後期～平安
谷田	平安	八日市	縄文後期、古墳後期～平安、中世
曲田城跡	中世	伝幡羅太郎館跡	中世
堀南	縄文前期、古墳前期・後期～平安	社前	縄文前期・中期、古墳後期～平安
桜田馬場	中世	No.8	古墳後期～平安
花小路	古墳後期、平安、中世	No.142	古墳後期～平安
高畑	弥生後期、古墳後期～平安	No.145	古墳後期～平安
戸森松原	古墳前・中期、奈良、平安	No.147	古墳後期～平安
上敷免森下	弥生中期、古墳後期	No.150	縄文後期、古墳後期～平安
上敷免北	縄文後期・晩期、古墳後期～平安	No.151	古墳後期～平安
上敷免	縄文中～晩期、弥生、古墳後期～平安	No.155	縄文中期・後期、古墳後期～平安
皿沼城跡	中世	No.156	縄文、古墳後期～平安
皿沼西	縄文後期、弥生、古墳前・中期、平安	No.180	弥生中期、古墳後期～平安
戸森前	古墳前期・中期・後期、奈良、平安	No.194	古墳後期
大沼弾正忠屋敷跡	中世	No.195	古墳後期
深谷町	縄文中期・後期、古墳中期		

第1表 森下遺跡及び周辺の遺跡一覧表



第2図 森下遺跡の位置と発掘調査区 (1/2,500)

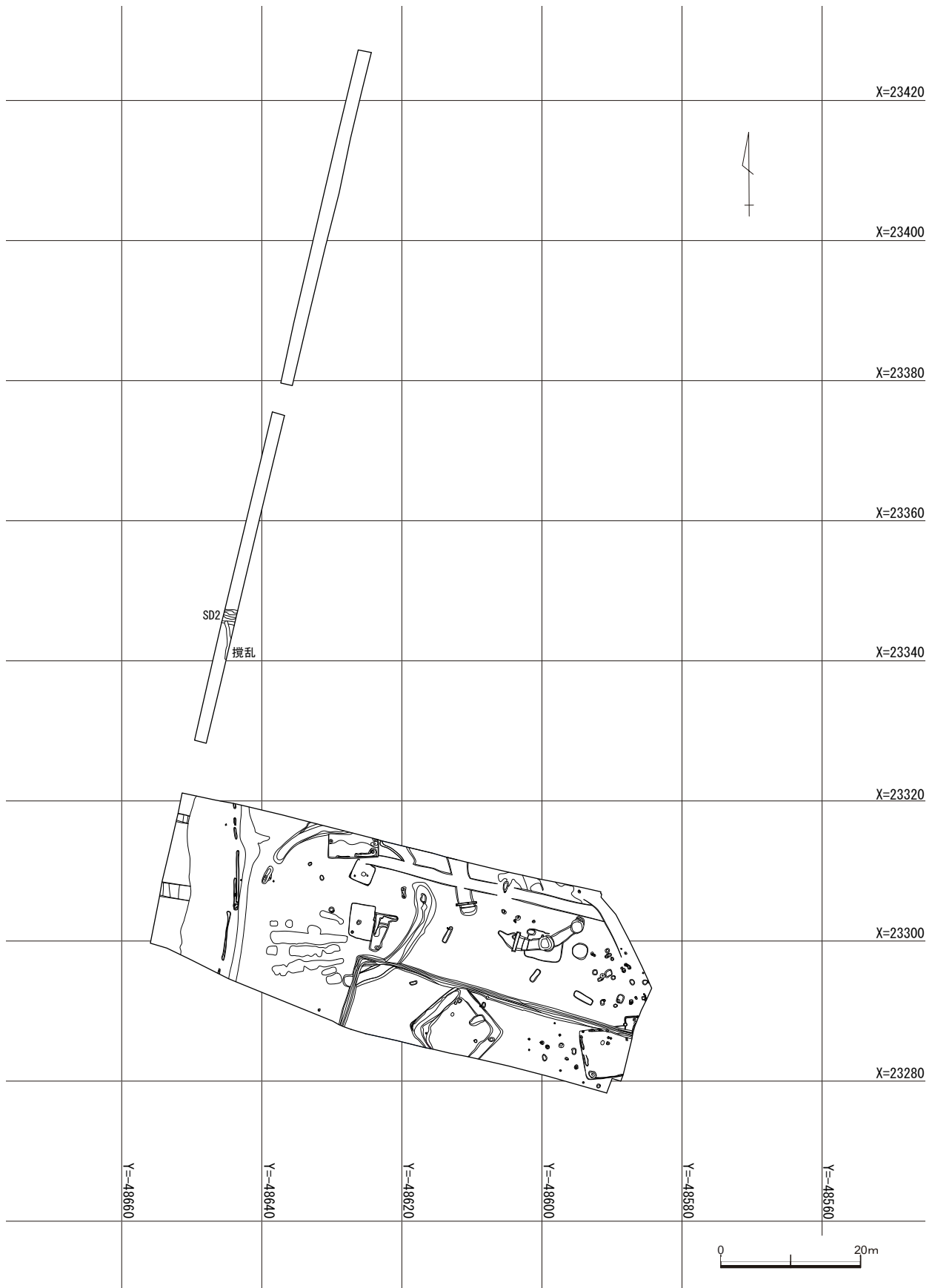
置の集落規模が拡大する。律令期には、深谷市の東部は幡羅郡、西部は榛沢郡、南部は男衾郡に属すると考えられる。榛沢郡の郡家正倉跡は岡の中宿遺跡で発見されている。幡羅郡家跡である東方の幡羅遺跡は、正倉や館等の遺構がこれまでに確認され、更にその範囲、内容を確認するための調査が継続中である。また、新屋敷東遺跡からは、正倉別院の可能性のある大型建物跡が検出されている。

平安時代には、深谷城跡、堀南遺跡、花小路遺跡等、台地の先端部に新たに集落が営まれるようになる。これらの集落は、榛沢郡と幡羅郡を結ぶ水路の可能性が指摘される福川の流域に位置する。

平安時代末期以降は、猪俣党武士団の居館が各地に出現する。代表的なのは、県指定史跡にもなっている人見館跡である。それに近接する吹張遺跡でも、館等の施設跡が検出されている。また、鎌倉街道上道の跡が、旧川本町域から旧花園町域に残る。そして室町時代以降は深谷上杉氏の本拠地となる。深谷上杉氏は、

当初庁鼻和城に居を構えたと言われるが、5代目房憲の時に、古河公方勢力との戦闘に備え、より堅固な深谷城に移ったとされる。深谷城跡の北東約1kmには、深谷上杉氏の宿老岡谷香丹が築いたと言われる皿沼城跡があり、北方の守りを堅固なものにしている。また、香丹が隠居後に移ったとされる曲田城跡が北西にある。東に約3kmの台地の先端部には東方城跡がある。周辺には他に家臣の館が分布していたと思われ、南方約1.8kmには、家臣の館跡である秋元氏館跡、南西約2.8kmには、古河公方勢力を牽制し人見地域を防衛するために築かれたと考えられる館跡が検出された押切遺跡が存在する。また、割山西遺跡では、伝承等が一切残っていないが、方形の区画溝が検出され、館跡と考えられている。仙元山南麓の押切遺跡西隣に位置する昌福寺は、房憲が創建したとされる。

江戸時代になると、深谷城は程なく廃城となり、深谷の大部分は天領となる。また、岡部には岡部藩があり、陣屋が構えられた。



第3図 森下遺跡第2次調査区全体測量図(1)



第4図 森下遺跡第2次調査区全体測量図(2)

Ⅲ 遺構と遺物

1 概要

森下遺跡は、これまでに埼玉県埋蔵文化財調査事業団により1回、深谷市教育委員会により1回調査が行なわれている。

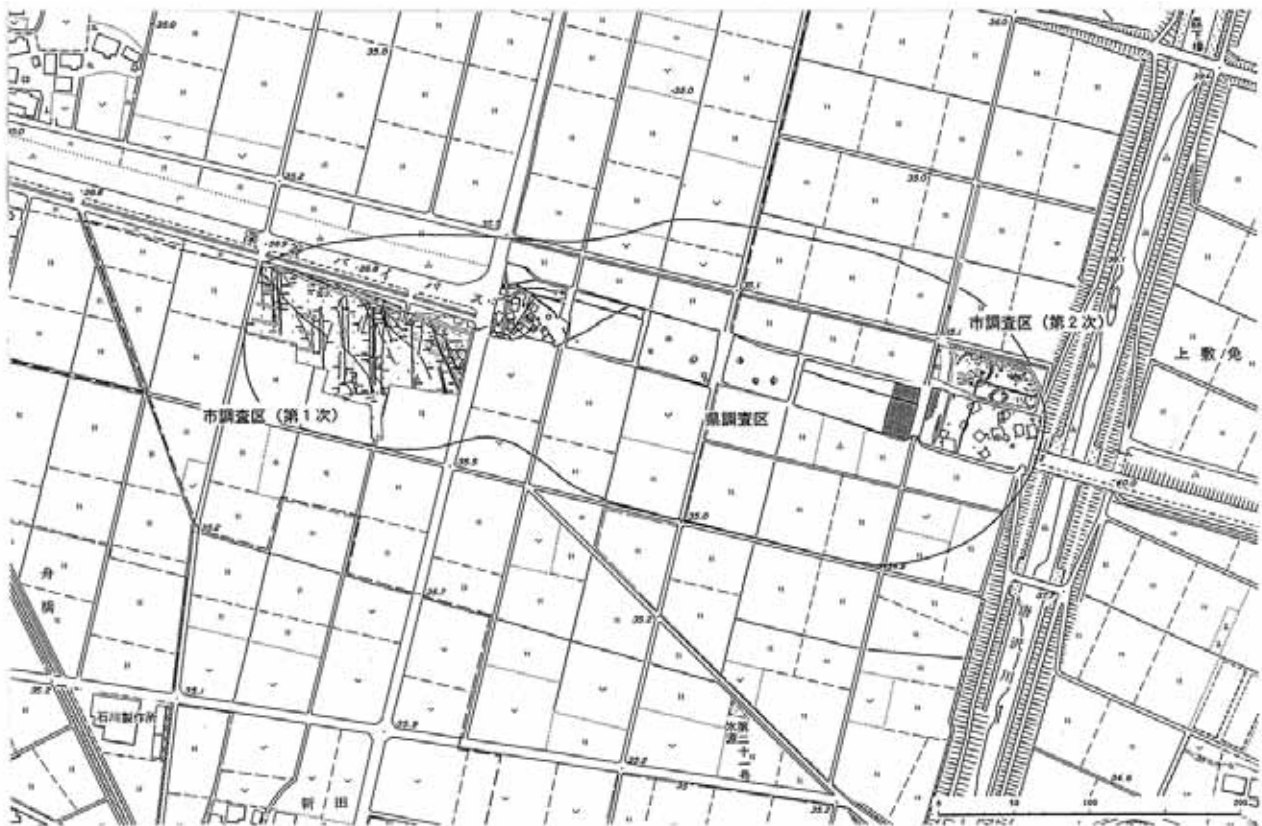
埼玉県埋蔵文化財調査事業団による調査では、今回調査区の南側隣接地が調査され、古墳時代中期の竪穴建物跡8棟、奈良・平安時代の掘立柱建物跡3棟、埋甕2基、中世の井戸跡1基、土坑22基、中近世の溝4条等が確認されている。この調査区における遺構確認面は砂層である。

今回の調査で検出された遺構は、竪穴建物跡7棟、特殊遺構1基、古墳跡2基、埴輪棺墓1基、土坑10基、溝5条等である。遺跡の時期は、主に古墳時代前期～平安時代である。古墳時代の竪穴建物跡1棟からは、

初源期のものと思われるカマドが確認された。遺構確認面である黄褐色の粘質土層までは深さ約30cmであり、その下層は砂層である。粘質土層の厚さは、調査区北半では比較的薄く、確認面が砂層の部分もみられる。

今回の調査区周辺における遺構確認面は、砂層と粘質土が混在している。この調査後に行なわれた工事中、地表下約5mから、長さ約3mの流木が出土した。分析した結果、樹種はクリで、縄文時代後期初頭のものと考えられた。このため、古墳時代以降の遺構確認面は、二次的に堆積したものであると推定され、縄文時代後期以降に堆積が進んだものと思われる。なお、流木が確認された深さから、遺物らしきものは確認されなかった。

埼玉県埋蔵文化財調査事業団による調査区は、東西370mに及び、今回調査区周辺の西側には河川跡があ



第5図 森下遺跡全体図

り、更に遺構が希薄な地帯が約 200 m にわたって広がる。それより西からは、奈良・平安時代の竪穴建物跡 4 棟、掘立柱建物跡 14 棟、溝 4 条、土坑 10 基等が確認されている。遺跡東部の遺構群とは、本来別個に捉えるべきものである。更に西側隣接部は、深谷市教育委員会によって調査が行なわれている。確認されている遺構は、奈良時代の竪穴建物跡 1 棟と、奈良・平安時代の掘立柱建物跡 4 棟、柵列跡 1 基、溝 83 条、道路跡 1 条、井戸跡 3 基、土坑 2 基、水田跡等である。建物跡は調査区の東部に限られ、大部分は水田域に当たると考えられる。条里の一部であった可能性が考えられる。

2 竪穴建物跡

第 1 号竪穴建物跡 (第 6～8 図、第 2 表)

調査区南部に位置し、第 1 号溝、第 1・2 号土坑に切られる。平面形態は方形で、一辺 10.1 m を測る。主軸方位は $N - 45^{\circ} - E$ である。確認面からの深さは 15cm を測る。

炉は北隅付近で 2 基確認された。焼土の範囲は、第 1 号炉跡が 50×40 cm、第 2 号炉跡が 40×35 cm である。貯蔵穴は北隅で確認された。長径 70cm、短径 60cm、床面からの深さは 40cm を測る。壁際は、1～2.1 m の幅で一段深くなる。床面からの深さは、15～25cm である。ピットは 4 基確認された。床面からの深さは P 1 が 4cm、P 2 が 16cm、P 3 が 6cm、P 4 が 14cm である。

図示できた遺物は、第 7 図 1～第 8 図 31 である。1・2 は手捏ねによるミニチュア土器、3～5 は高坏、6～8 は壺である。8 は口縁部内面に突帯が貼付された大型壺である。白色の軽石状の粒子を多く含むざらついた胎土や形態から、駿河地方で生産された大廓式土器の搬入品と考えられる。9～11・14～27 は甕、12・13 は壺、28～30 は台付甕である。31 は坏で、混入と思われる。

遺構の時期は、古墳時代前期と推定される。

第 2 号竪穴建物跡 (第 9・10 図、第 3 表)

調査区南東部に位置し、第 3 号竪穴建物跡、第 1 号溝に切られる。平面形態は方形で、南北軸 7.1 m、東西軸 7.3 m 以上を測る。主軸方位は $N - 10^{\circ} - W$ である。確認面からの深さは 5cm を測る。

炉は中央やや北寄りから 1 基確認された。焼土の範囲は、長径 60cm、短径 45cm である。貯蔵穴は南西隅で確認された。長軸 120cm、短軸 95cm、床面からの深さ 80cm を測る。壁際からは、幅 15～50cm の溝が断続的に確認された。床面からの深さは 5cm 程度である。ピットは 3 基確認された。床面からの深さは、P 1 が 8cm、P 2 が 30cm、P 3 が 20cm である。しかし、P 1 からは、9 世紀代の須恵器等 (第 39 図 4) が出土しており、建物跡には伴わない。

図示できた遺物は、第 10 図 1～8 である。1～3 は高坏、4・6 は甕、5 は台付甕、7 は甗である。8 は緑色凝灰岩製の管玉である。

遺構の時期は、古墳時代中期と推定される。

第 3 号竪穴建物跡 (第 9・11 図、第 4 表)

調査区南東部に位置し、第 2 号竪穴建物跡を切り、第 1 号溝に切られる。平面形態は方形で、南北軸 3.5 m 以上を測る。主軸方位は、ほぼ正方位である。確認面からの深さは 5cm を測る。

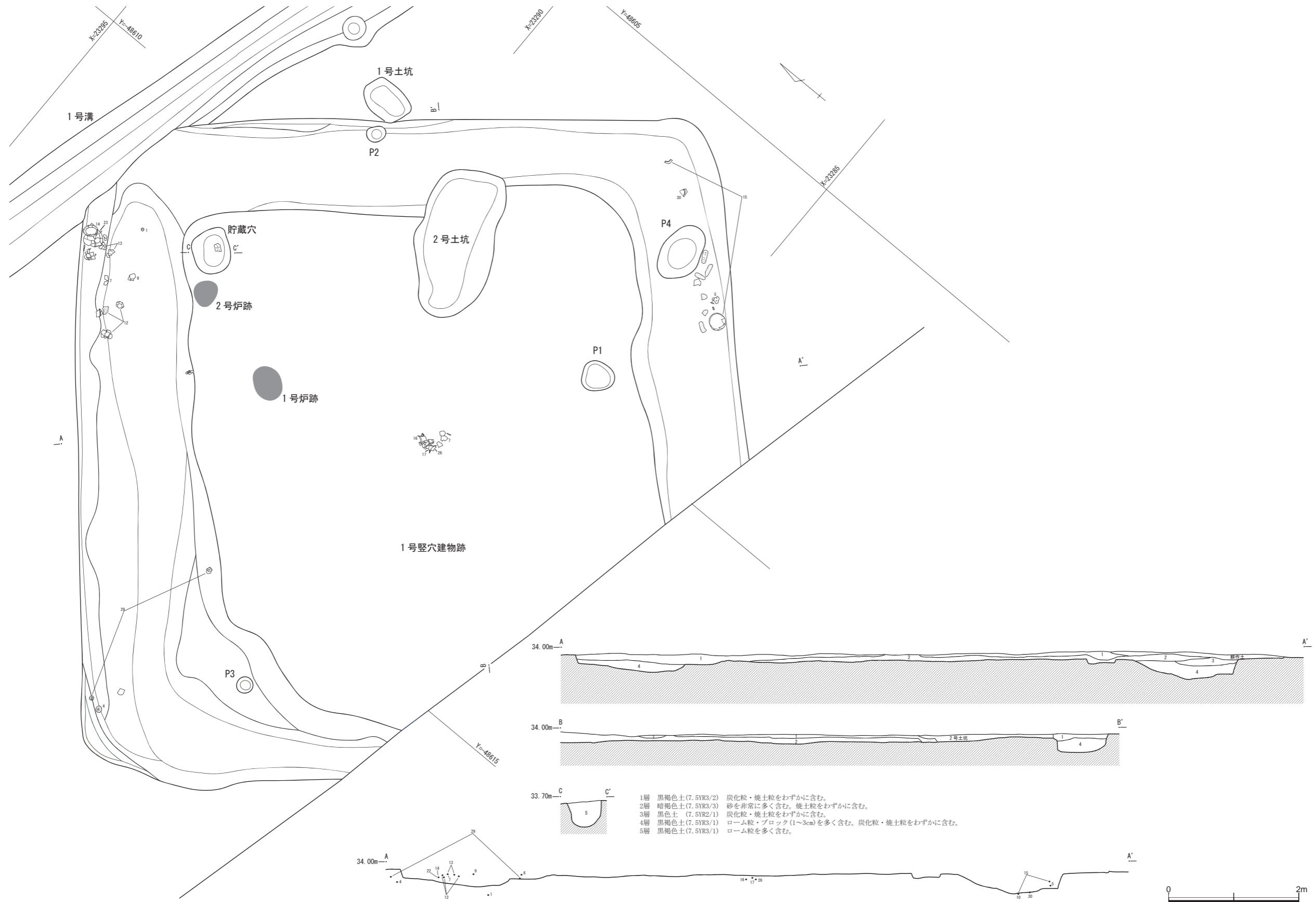
カマドは確認されなかった。壁際は幅約 15cm で、床面からの深さは約 5cm である。ピットは 2 基確認された。床面からの深さは、P 1 が 18cm、P 2 が 23cm である。

図示できた遺物は、第 11 図 1～3 である。1 は坏、2・3 は甕である。

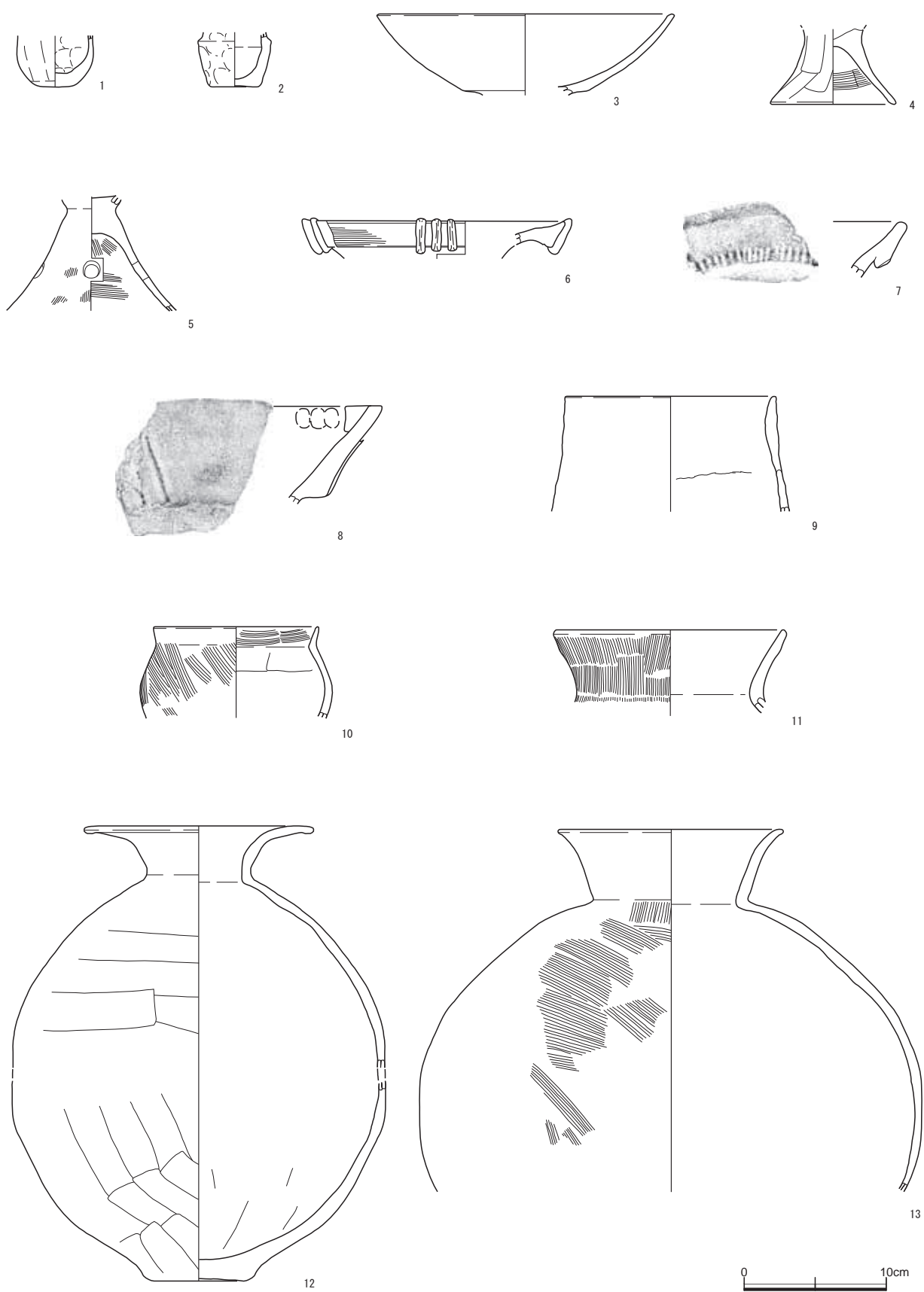
遺構の時期は、8 世紀末頃と推定される。

第 4 号竪穴建物跡 (第 12・13 図、第 5 表)

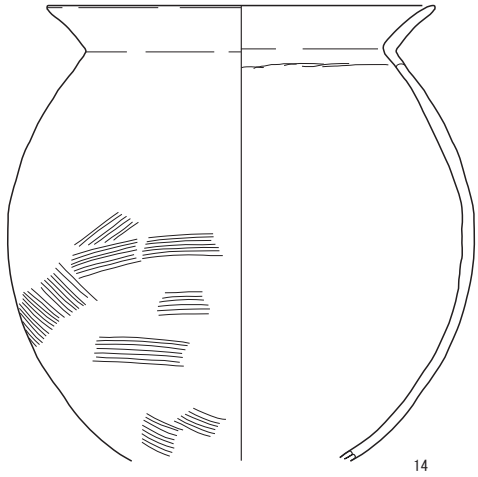
調査区東部に位置し、第 4 号竪穴建物跡、第 1 号古墳跡、第 1 号埴輪棺墓、第 8 号土坑に切られる。平面形態は方形で、東西軸 5.3 m、南北軸 4.0 m を測る。主軸方位は $N - 15^{\circ} - E$ である。



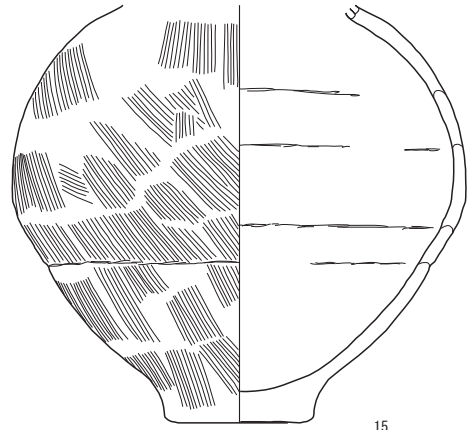
第6図 第1号竪穴建物跡



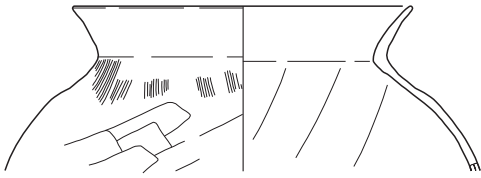
第7图 第1号竖穴建物跡出土遺物(1)



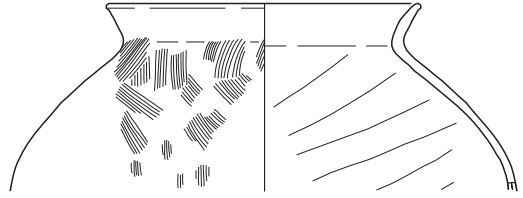
14



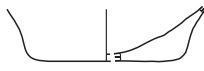
15



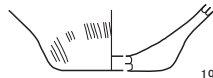
16



17



18



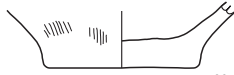
19



20



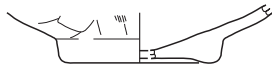
21



22



23



24



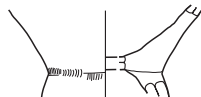
25



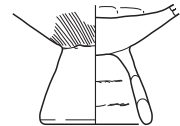
26



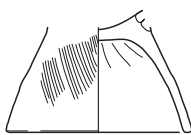
27



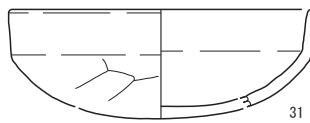
28



29



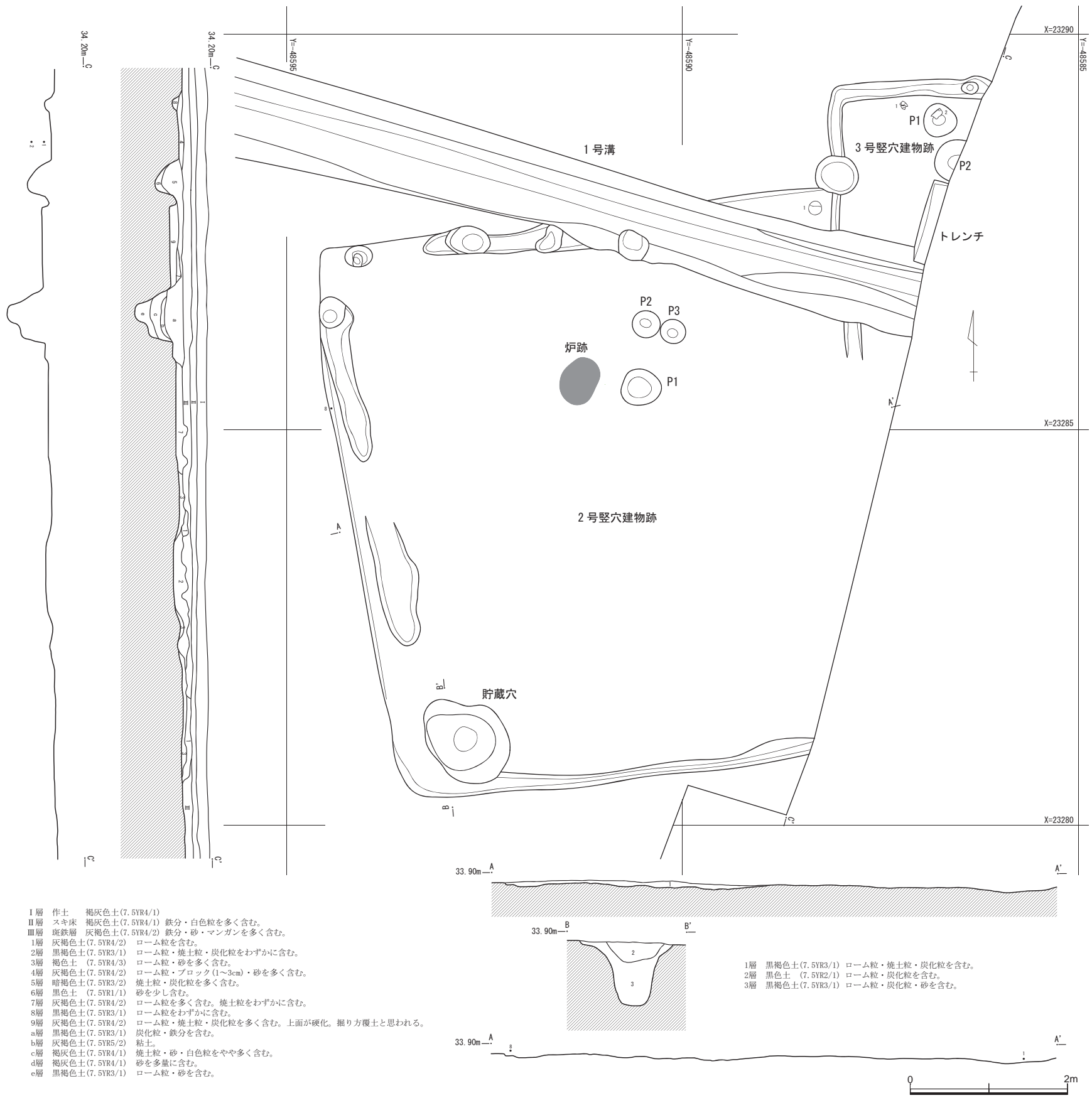
30



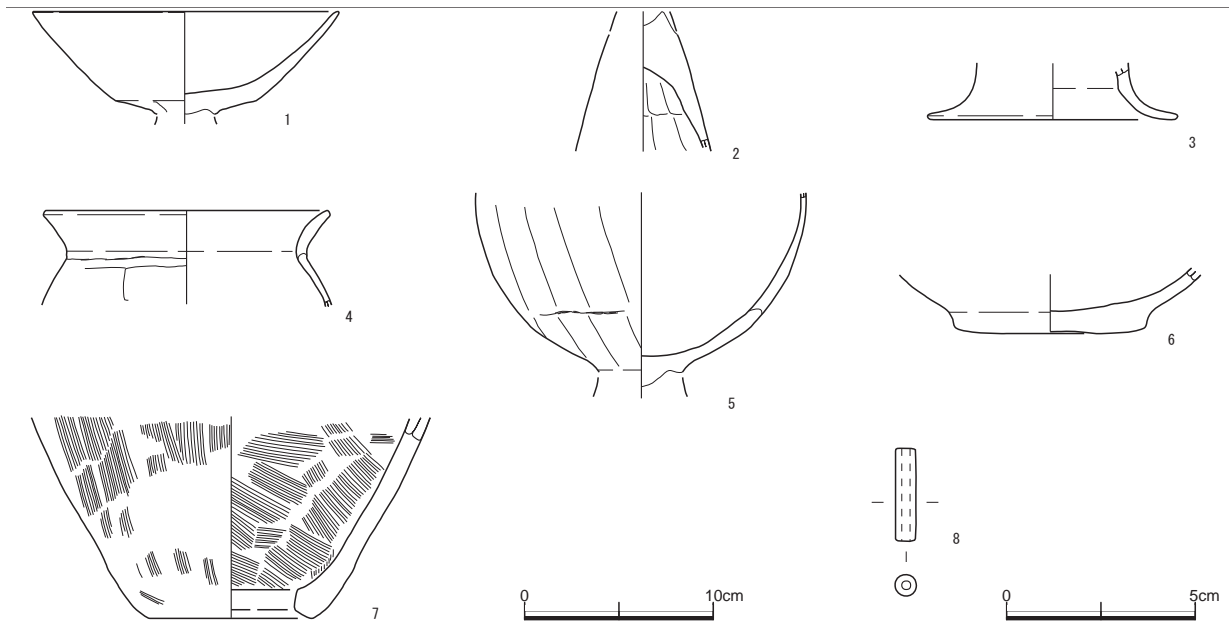
31



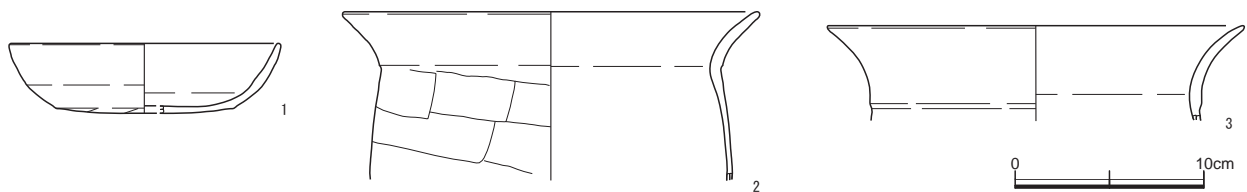
第8图 第1号竖穴建物跡出土遺物(2)



第9図 第2・3号竖穴建物跡



第10図 第2号竪穴建物跡出土遺物



第11図 第3号竪穴建物跡出土遺物

確認面からの深さは5cmを測る。床面はほぼ平坦で、壁は斜めに立ち上がる。炉や貯蔵穴、壁溝は確認されなかった。

図示できた遺物は、第13図1～7である。1～3は埴、4～6は甕、7は台付甕である。

遺構の時期は、古墳時代中期と推定される。

第5号竪穴建物跡 (第14～17図、第6・7表)

調査区北部に位置し、第2号古墳跡に切られる。平面形態は方形で、南北軸は不明だが、東西軸は7.2mを測る。主軸方位は、ほぼ正方位である。

確認面からの深さは5cmを測り、南壁に向かって深く傾斜する。最深部の深さは、確認面から45cmである。南壁付近からは、勾玉や滑石製模造品等の遺物や、炭化材が出土した。

東壁際には、導入期のものと思われるカマドがある。袖は確認されなかった。カマドの南隣には、貯蔵穴が確認された。貯蔵穴は長径105cm、短径55cm、床面からの深さ25cmを測る。ピットは西壁付近から1基確認された。P1は確認面からの深さ4cmを測る。

図示できた遺物は、第16図1～第17図18である。1～5は椀、6～9は高坏、10～14は甕、15・16は壺である。17は碧玉製の勾玉、18は滑石製の模造品である。

遺構の時期は、古墳時代中期末頃と推定される。

第6号竪穴建物跡 (第18・19図、第8表)

調査区北部に位置する。平面形態は方形で、一辺3mを測る。主軸方位は、N-20°-Eである。床面は北に向かって若干傾斜し、確認面からの深さは

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	H	ミニチュア	-	-	2.4	ABCHI	普	赤褐	60%	
2	H	ミニチュア	-	-	3.4	ABCDEH	普	灰褐	70%	
3	H	高坏	(20.6)	-	-	ABCEH	普	灰褐	15%	
4	H	高坏	-	-	8.6	ABCEH	普	黄橙	50%	
5	H	高坏	-	-	-	ABCEH	普	赤褐	50%	
6	H	壺	(18.8)	-	-	ABCEH	普	橙	5%	
7	H	壺	-	-	-	ABCEHI	普	にぶい橙	-	
8	H	壺	-	-	-	ABCDH	普	黄橙	5%	
9	H	甕	(14.6)	-	-	ABCEH	普	橙	10%	
10	H	甕	(11.4)	-	-	ABCDEH	普	橙	10%	
11	H	甕	16.0	-	-	ABCEHI	普	にぶい橙	25%	
12	H	壺	15.4	(32.0)	6.5	ABCEH	普	黄橙	50%	
13	H	壺	15.4	-	-	ABCEFH	普	赤褐	30%	
14	H	甕	20.3	-	-	ABCDEH	普	橙	70%	
15	H	壺	-	-	7.0	ABCEH	普	にぶい橙	40%	
16	H	甕	(17.8)	-	-	ABCE	普	橙	10%	
17	H	甕	(16.4)	-	-	ABCDEH	普	黄橙	10%	
18	H	甕	-	-	(7.6)	ABCEH	不良	灰	5%	
19	H	甕	-	-	(5.6)	ABCE	普	黄橙	5%	
20	H	甕	-	-	5.6	ABCEH	普	橙	5%	
21	H	甕	-	-	7.0	ABCEH	普	灰橙	5%	
22	H	甕	-	-	8.0	ABCE	普	橙	10%	内側に炭化物が付着
23	H	甕	-	-	(8.0)	ABCEHI	普	橙	5%	
24	H	甕	-	-	(8.0)	ABCEH	普	暗橙	5%	
25	H	甕	-	-	(8.0)	ABCEH	普	橙	5%	
26	H	甕	-	-	6.0	ABCDEH	普	橙	10%	
27	H	甕	-	-	(7.6)	ABCEH	普	赤褐	10%	
28	H	台付甕	-	-	-	ABCFH	普	橙	5%	
29	H	台付甕	-	-	5.6	ABCHI	普	にぶい橙	15%	
30	H	台付甕	-	-	9.6	ABCEH	普	黄橙	15%	
31	H	坏	(15.8)	(5.8)	-	ABEI	普	橙	20%	

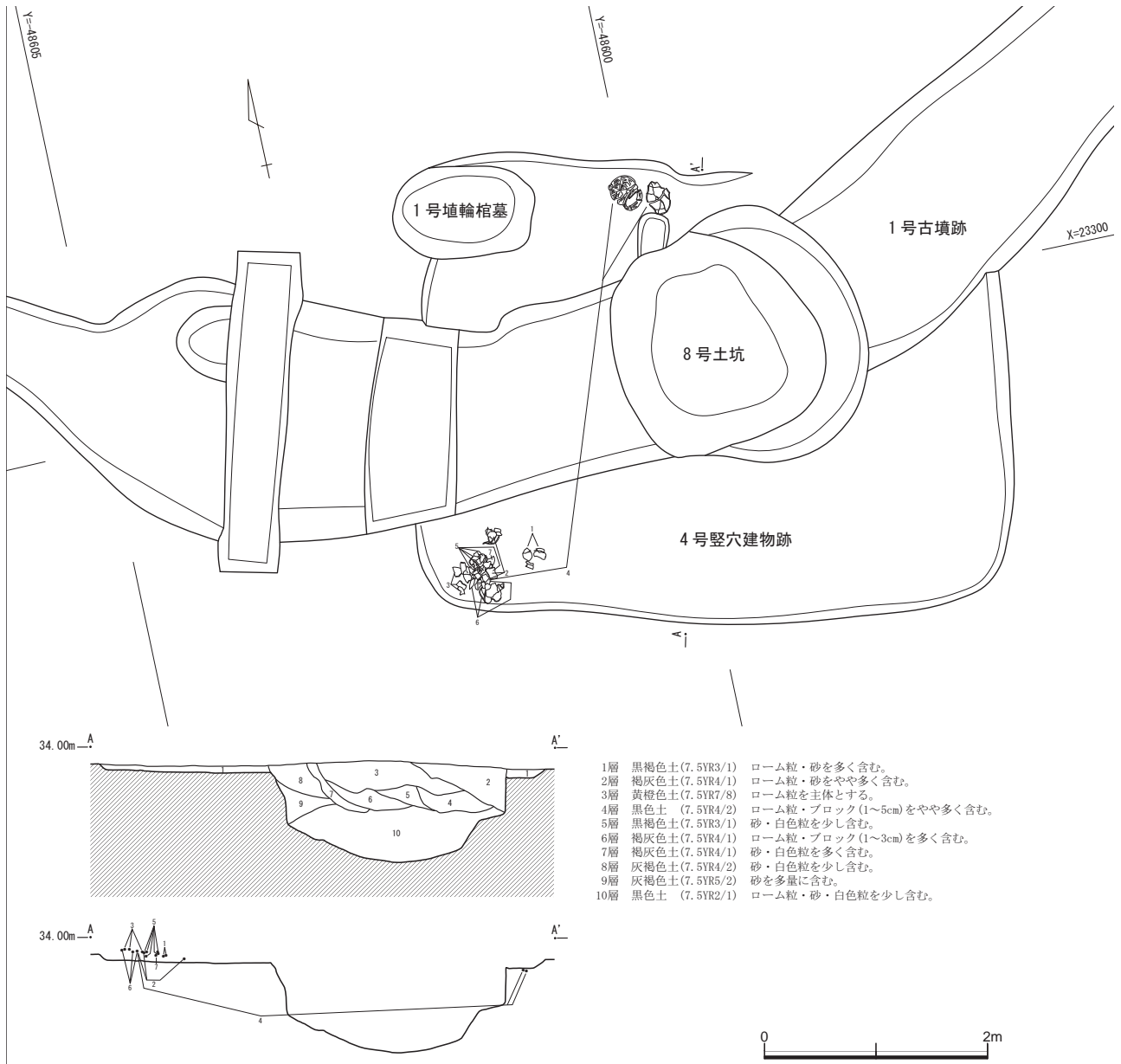
第2表 第1号竖穴建物跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	H	高坏	16.1	-	-	ABCE	普	赤褐	60%	
2	H	高坏	-	-	-	ABCEI	普	橙	20%	
3	H	高坏	-	-	(13.0)	ABCEI	普	橙	20%	
4	H	甕	15.0	-	-	ABCEH	普	暗褐	10%	
5	H	台付甕	-	-	-	ABCEH	普	にぶい橙	20%	
6	H	甕	-	-	10.0	ABCEH	普	橙	5%	
7	H	甗	-	-	(8.5)	ABCE	良	橙	15%	
8		管玉	長2.4	幅0.5	厚0.5					緑色凝灰岩製

第3表 第2号竖穴建物跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	H	坏	(14.2)	(3.7)	-	ABCEH	普	橙	30%	
2	H	甕	(22.0)	-	-	ABCHI	普	橙	15%	
3	H	甕	(22.0)	-	-	ABCDE	普	橙	5%	

第4表 第3号竖穴建物跡出土遺物観察表



第12図 第4号竖穴建物跡、第8号土坑

20cm を測る。

炉は中央付近から2基確認された。焼土の範囲は、第1号炉跡が55×50cm、第2号炉跡が15×15cmである。貯蔵穴や壁溝は確認されなかった。ピットは南西隅から1基確認された。P1は床面からの深さ19cmを測る。

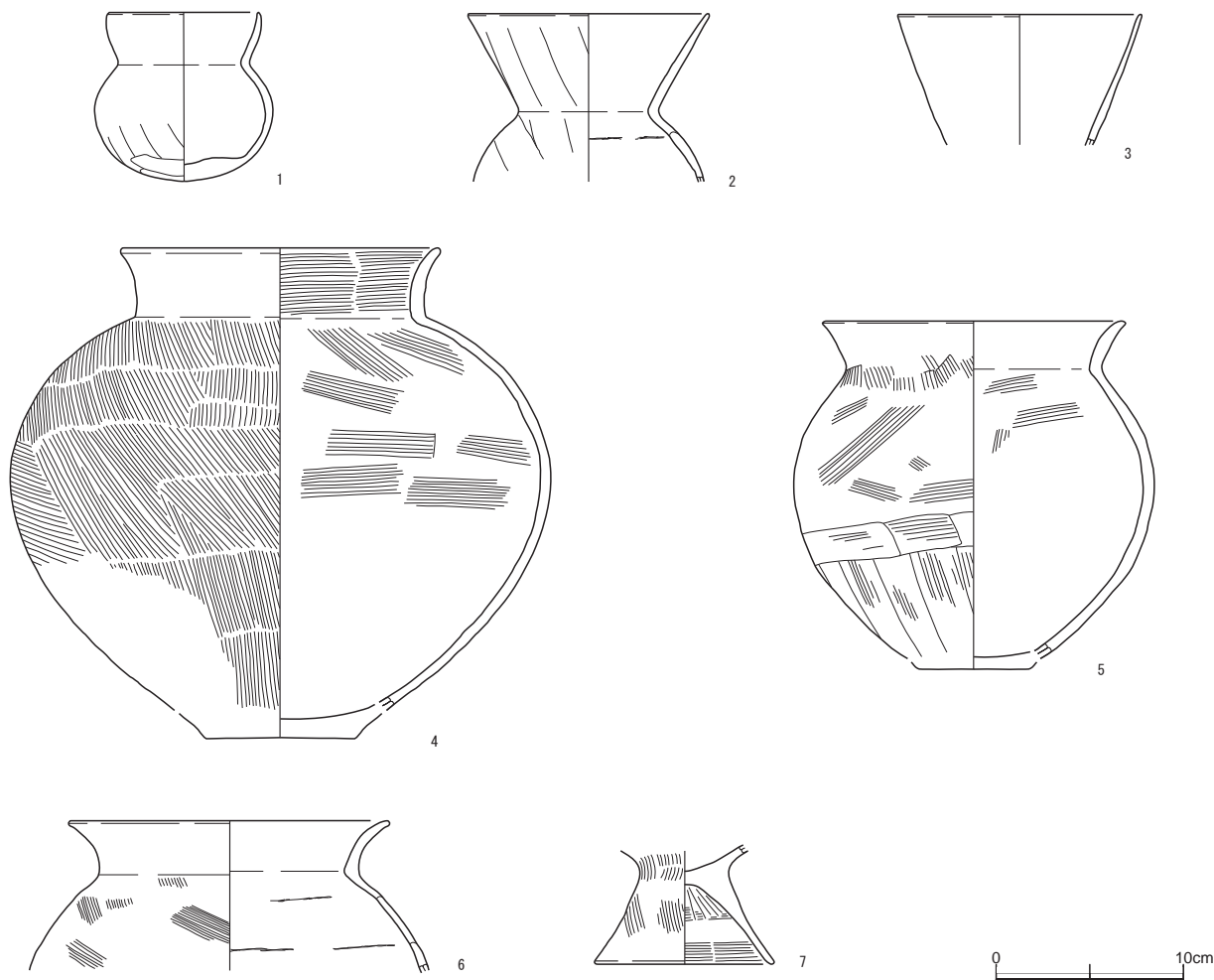
図示できた遺物は、第19図1～5である。1は坏、2～4は甕、5は台付甕である。

遺構の時期は、古墳時代中期と推定される。

第7号竖穴建物跡 (第20図)

調査区中央部に位置し、第1号特殊遺構に切られる。平面形態は長方形で、長軸5m、短軸3.5mを測る。主軸方位はN-7°-Eである。床面はほぼ平坦で、確認面からの深さは15cmを測る。一部で噴砂が認められた。

炉は中央やや西寄りで1基確認された。70×60cmの不整楕円形で、床面から10cmの掘り込みを有する。貯蔵穴や壁溝は確認されなかった。ピットは南西隅から1基確認された。P1は床面からの深さ7cmを測る。



第13図 第4号竪穴建物跡出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	H	罎	8.0	9.0	-	ABCEHI	普	橙	90%	
2	H	罎	12.8	-	-	ABCE	普	橙	40%	
3	H	罎	12.8	-	-	ABCEH	普	赤褐	25%	
4	H	甕	16.6	(26.0)	-	ABCEH	普	橙	60%	
5	H	甕	(15.7)	(18.6)	-	ABCDEH	普	赤褐	50%	
6	H	甕	(17.0)	-	-	ABCE	普	橙	20%	
7	H	高坏	-	-	9.5	ABCEH	普	橙	30%	

第5表 第4号竪穴建物跡出土遺物観察表

図示できる遺物は出土しなかった。
遺構の時期は、古墳時代中期頃と思われる。

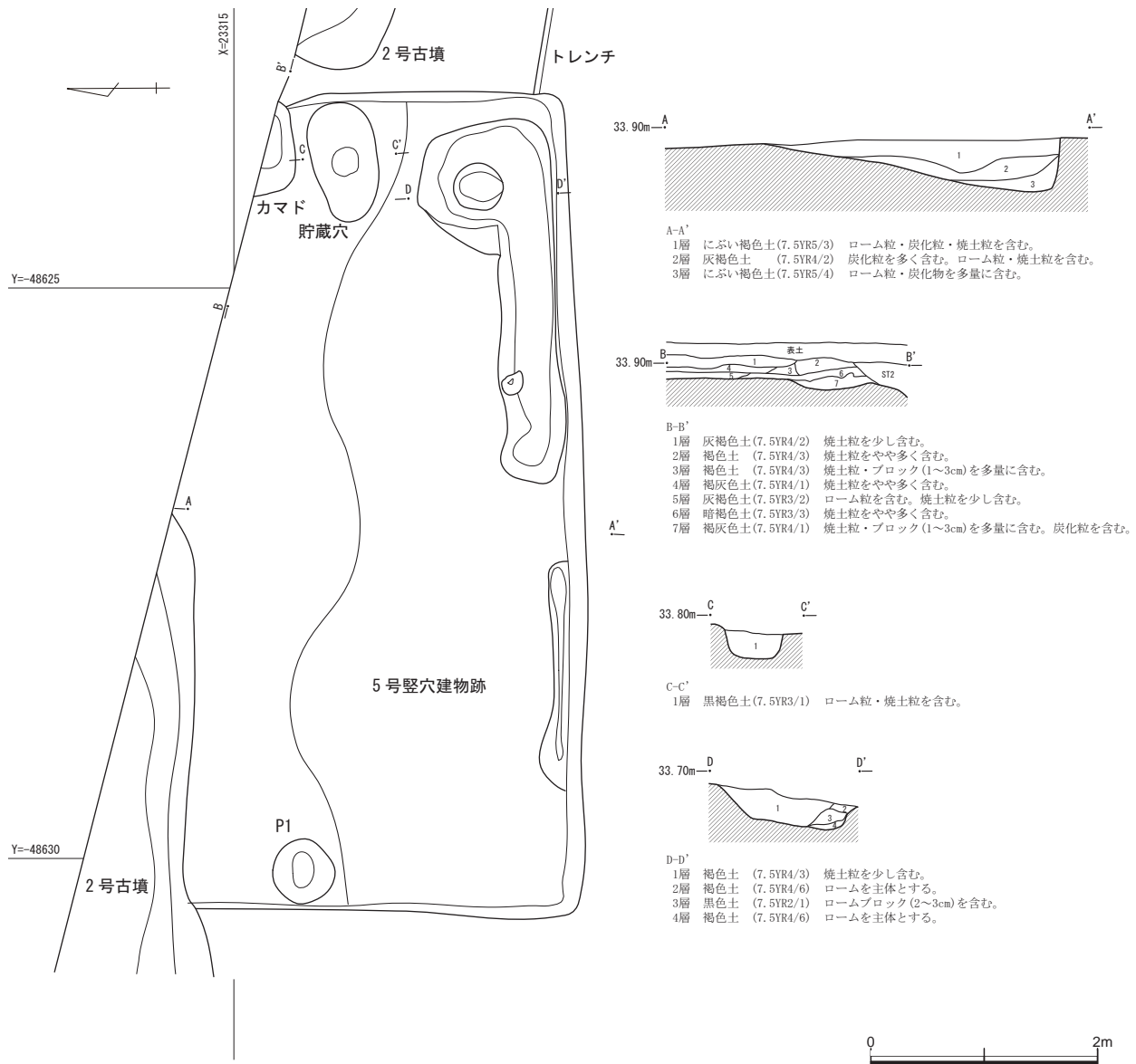
平面形態は不整形で、長軸5.5mを測る。主軸方位はN-7°-Eである。

平面形態は整っていないが、北西及び南東部は直角をなしている。また、西壁は真っ直ぐ立ち上がるのに対し、東側に向かって浅くなり、東壁の立ち上がりは明確でない。確認面からの深さは、西壁際の最深部は55cm、東壁付近は15cmである。こうしたことから、竪穴建物の

3 特殊遺構

第1号特殊遺構 (第20図)

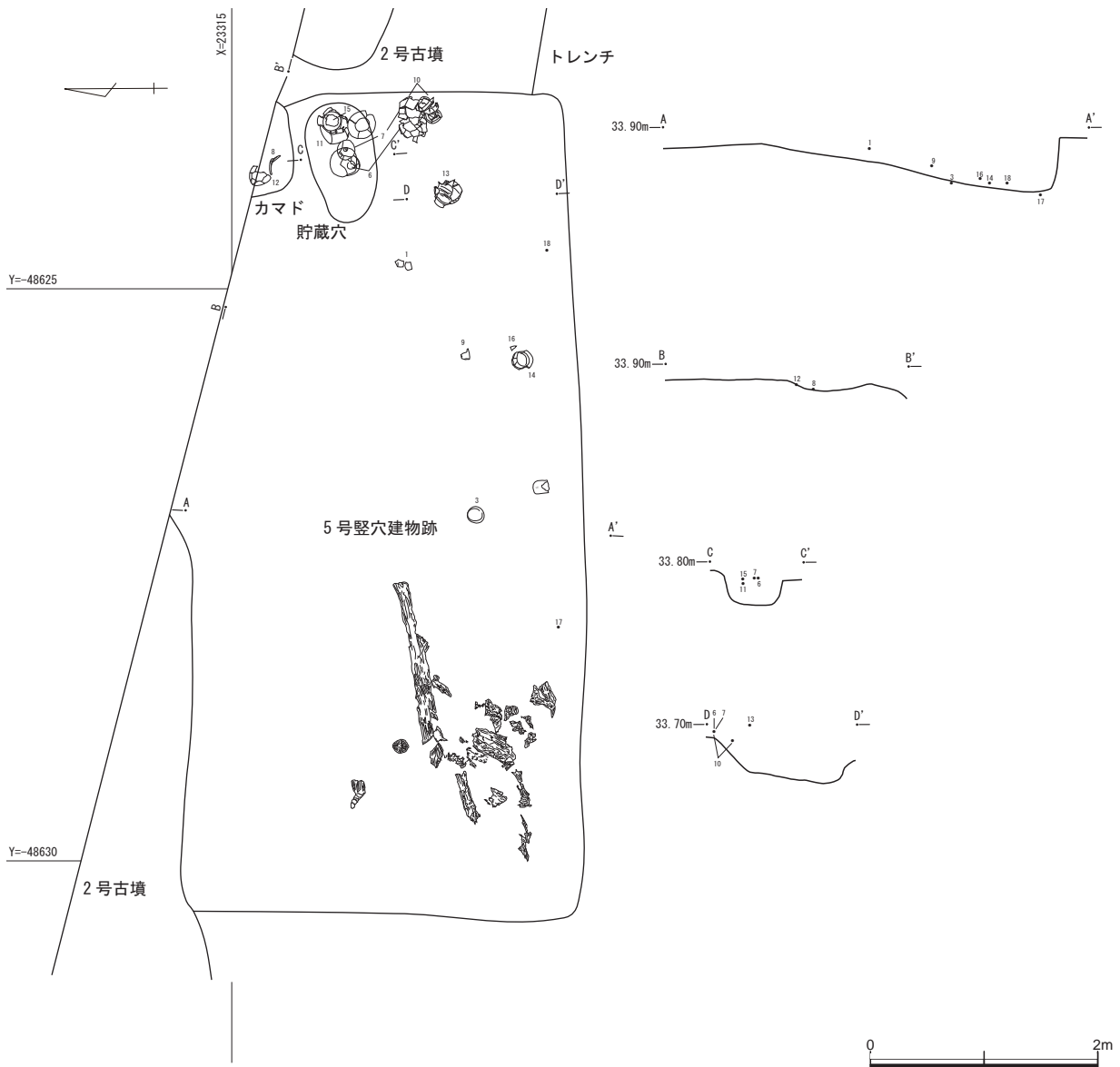
調査区中央部に位置し、第7号竪穴建物跡を切る。



第14図 第5号竪穴建物跡

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	H	椀	(13.7)	-	-	ABCE	普	橙	15%	
2	H	椀	(14.4)	-	-	ABC	普	橙	15%	
3	H	椀	14.4	5.5	2.5	ABCEI	普	橙	100%	
4	H	椀	-	-	3.2	ABCEI	普	橙	20%	
5	H	椀	-	-	3.6	ABC	普	橙	30%	
6	H	高坏	17.2	-	-	ABC	普	橙	50%	
7	H	高坏	17.6	-	-	ABC	普	橙	50%	
8	H	高坏	(21.3)	-	-	ABCE	普	橙	20%	
9	H	高坏	-	-	10.4	ABCE	普	橙	30%	
10	H	甕	18.5	30.1	7.3	ABCDEH	普	橙	90%	
11	H	甕	18.2	-	-	ABDEH	普	橙	50%	
12	H	甕	-	-	6.0	ABCDEFHI	普	橙	25%	

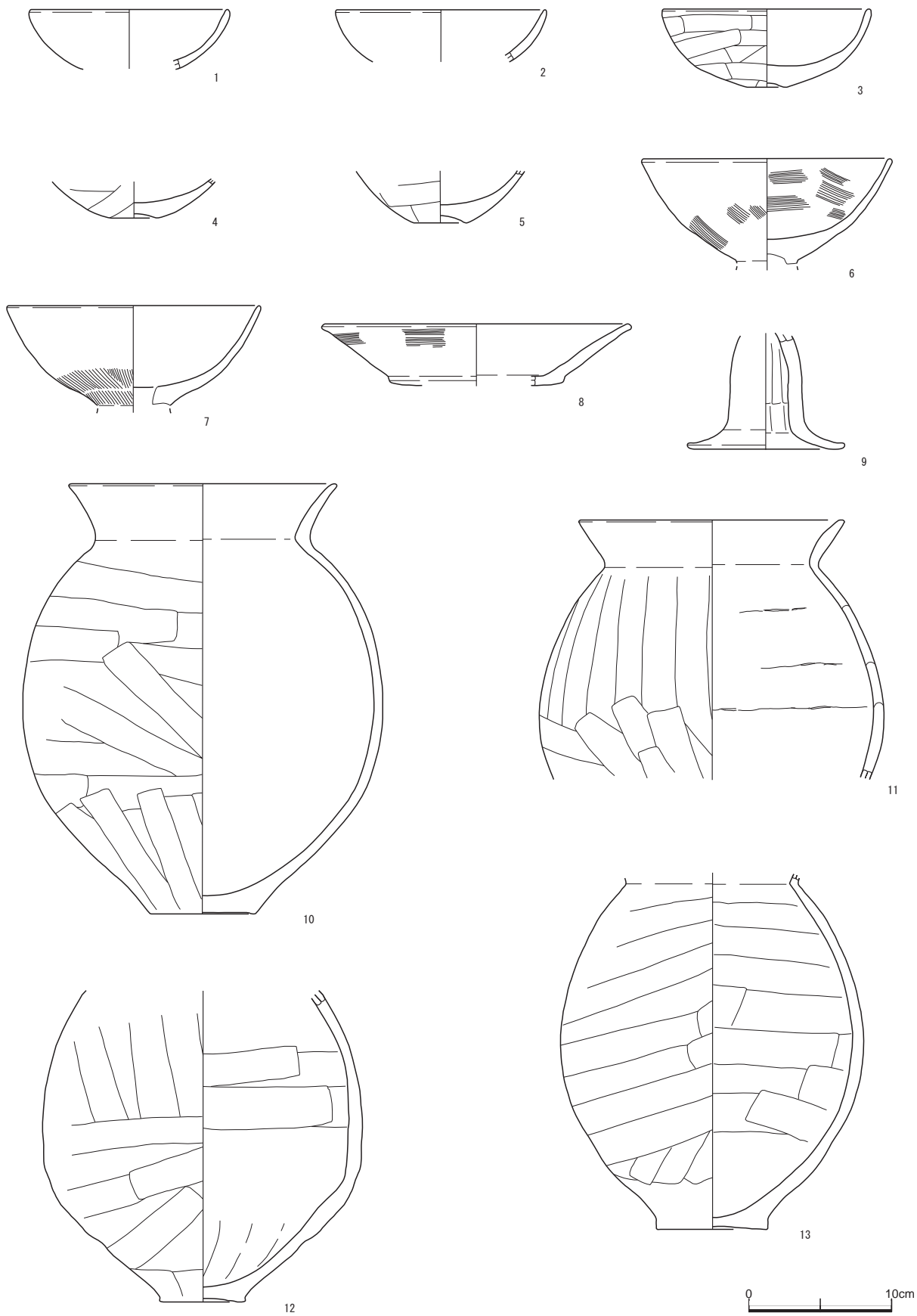
第6表 第5号竪穴建物跡出土遺物観察表(1)



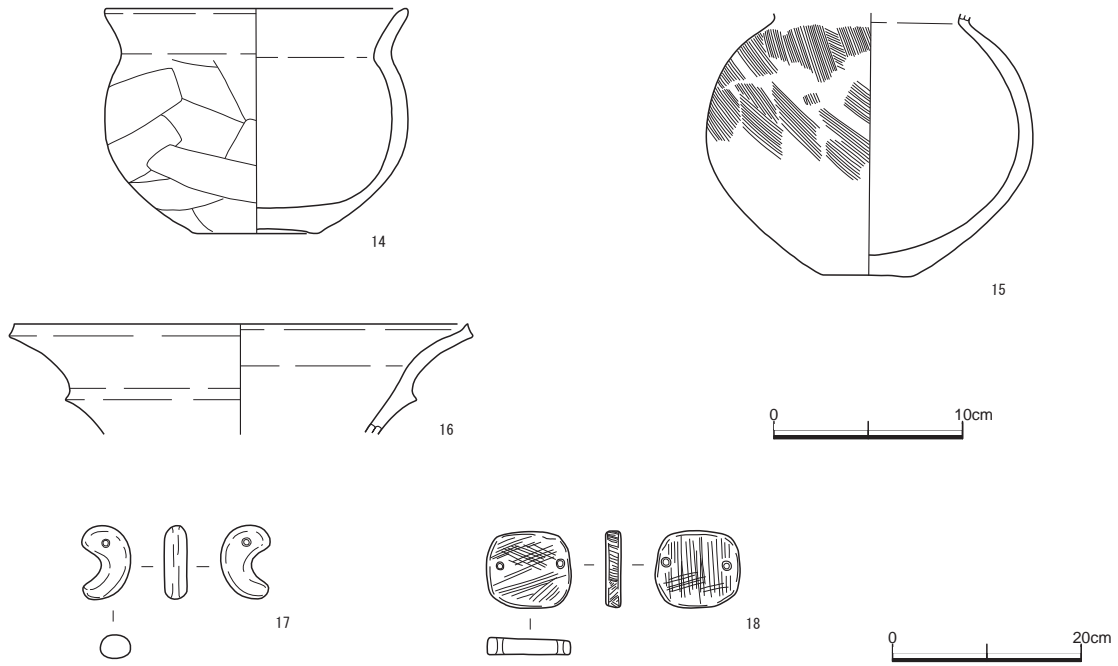
第15図 第5号竪穴建物跡遺物出土状況

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
13	H	甕	-	-	7.6	A B C E F H	普	橙	60%	
14	H	甕	(15.8)	11.9	6.0	A B C E H	普	橙	85%	
15	H	壺	-	-	4.6	A B C E I	普	橙	75%	
16	H	壺	24.0	-	-	A B E	普	橙	20%	
17	H	勾玉	長 1.9	幅 1.2	厚 0.6					碧玉製
18		石製模造品	長 2.0	幅 2.2	厚 0.5					滑石製

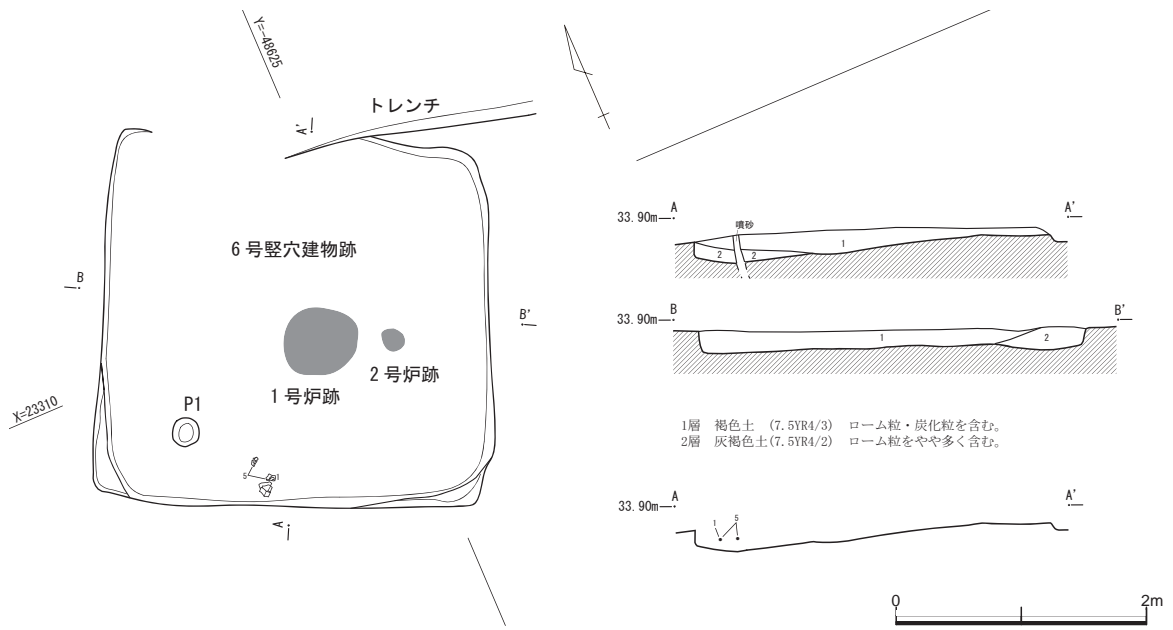
第7表 第5号竪穴建物跡出土遺物観察表(2)



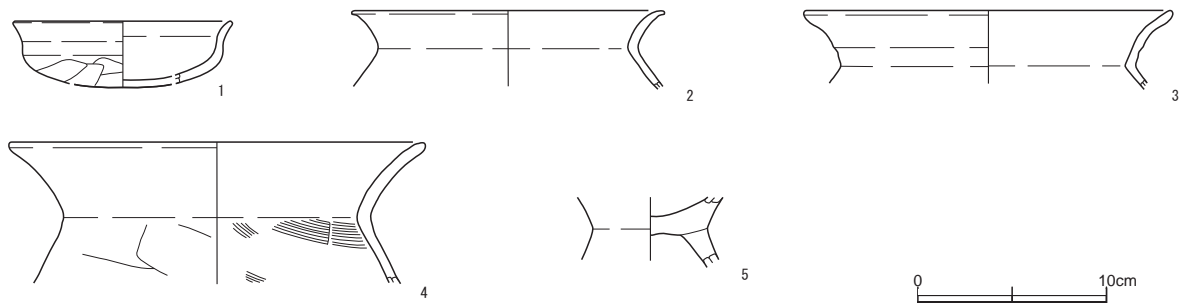
第16图 第5号竖穴建物跡出土遺物(1)



第17図 第5号竪穴建物跡出土遺物(2)



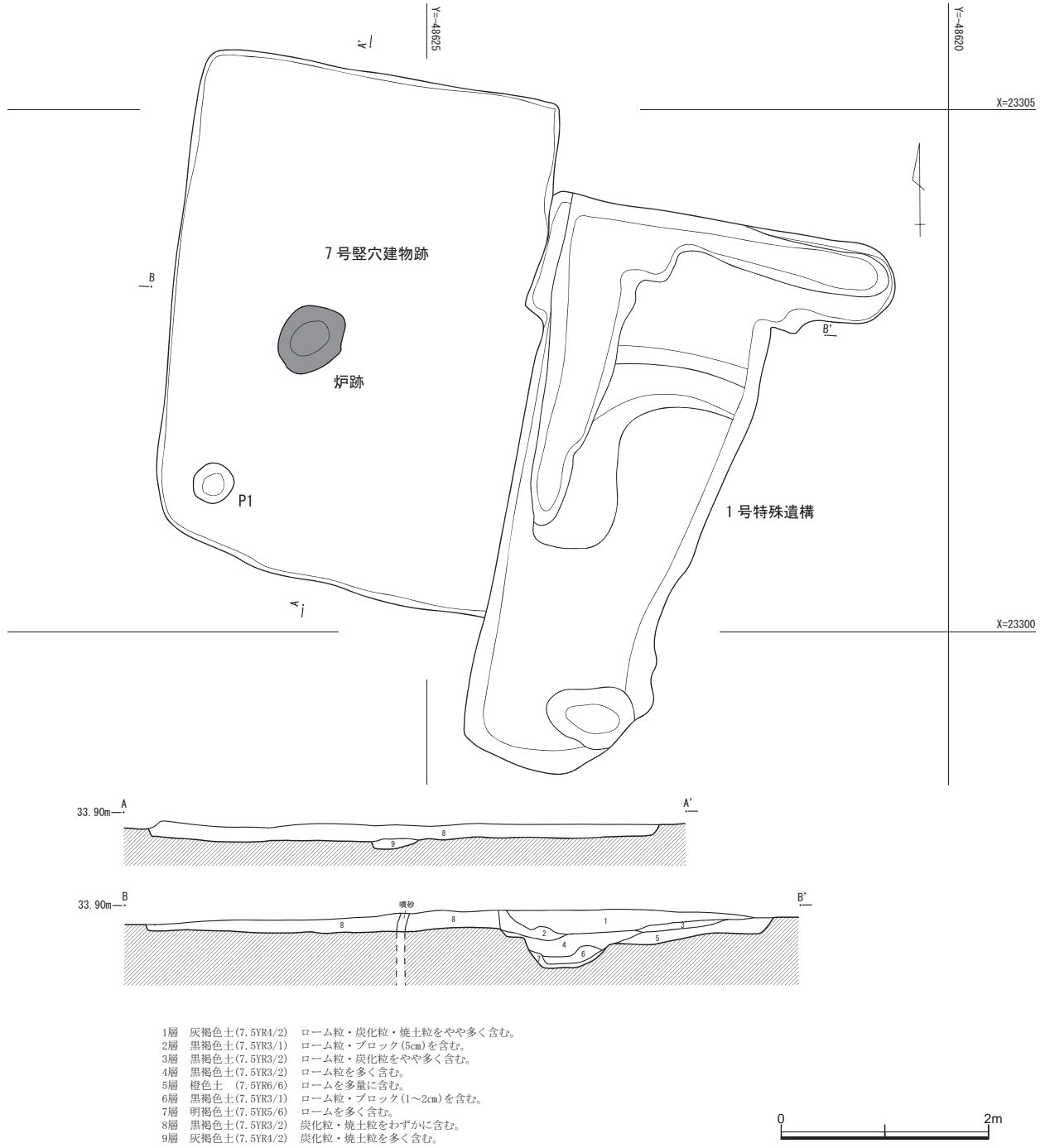
第18図 第6号竪穴建物跡



第19図 第6号竪穴建物跡出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	H	坏	(11.4)	(3.5)	-	A B C E	普	黄橙	20%	
2	H	甕	(16.4)	-	-	A B C E H	普	赤褐	5%	
3	H	甕	(19.4)	-	-	A B C E H	普	橙	5%	
4	H	甕	(21.8)	-	-	A B C E H	普	橙	10%	
5	H	台付甕	-	-	-	A B C E H	普	黄橙	10%	

第8表 第6号竖穴建物跡出土遺物観察表



第20図 第7号竖穴建物跡、第1号特殊遺構

掘削途中で放棄したものの可能性が考えられる。

遺物はほとんど出土しなかった。

遺構の時期は不明だが、古墳が築造される以前の、古墳時代中期頃と思われる。

4 古墳跡

第1号古墳跡 (第21・22図、第9表)

調査区北東部に位置し、北半部は調査区外にある。第4号竪穴建物跡を切り、第7・8号土坑に切られる。墳丘は遺存しておらず、周堀のみ確認された。墳丘径18m程度の円墳と推定される。

周堀の幅は1.6～2.6mで、断続的に巡る。西側の周堀はやや直線的である。断面形は逆台形で、壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは30cmを測る。

図示できた遺物は、第22図1～6である。1・2は土師器甕、3～6は円筒埴輪である。3・4の突帯はいずれもM字形である。調整は、外面は3～6はタテハケ、内面は3がナナメナデ、4・5はナナメハケ、6はナナメ・ヨコナデが施される。

遺構の時期は明確ではないが、第1号埴輪棺墓との関係から、古墳時代後期前葉と推定される。

第2号古墳跡 (第23～27図、第10・11表)

調査区西半部に位置し、大部分が調査区内にある。第5号竪穴建物跡を切り、第1号溝に切られる。墳丘は遺存しておらず、周堀のみ確認された。墳丘径約20mの円墳と推定される。

周堀の幅は0.9～3.0mで、断続的に巡る。南西部ではほとんど確認されなかった。断面形は逆台形で、壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは35cmを測る。

図示できた遺物は、第26図1～第27図34である。第26図1～11は坏、12は椀、13～20は高坏、21は鉢、22～24は埴、25は甕、26・27は甗である。第27図28～30は甕、31は台付甕、32は円筒埴輪、33は須

恵器甕、34は打製石斧である。32の調整は、外面はタテハケ、内面はナナメ・ヨコハケが施される。

遺構の時期は、6世紀代と推定される。

5 埴輪棺墓

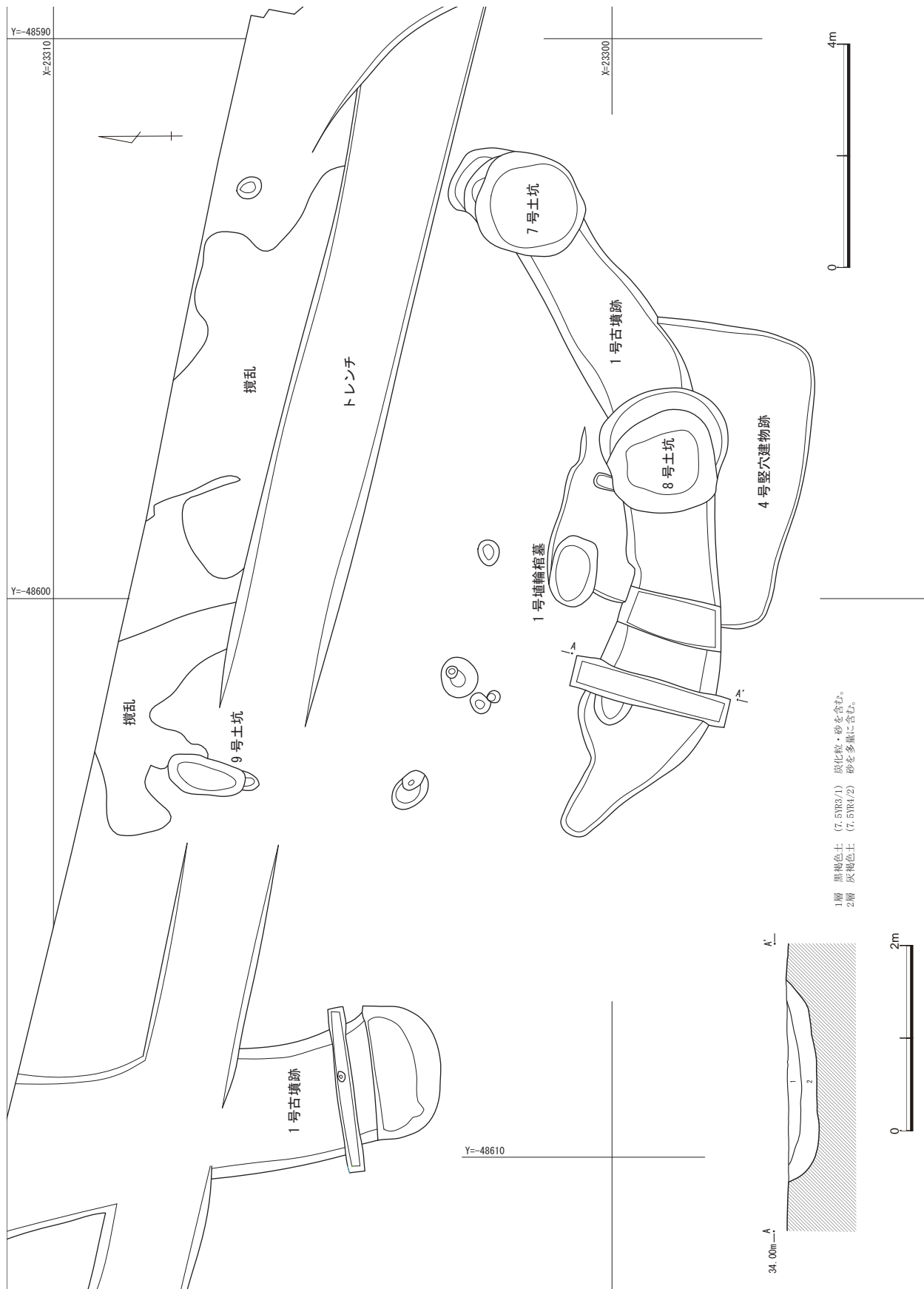
第1号埴輪棺墓 (第28～30図)

調査区東部に位置し、第4号竪穴建物跡を切る。第1号古墳の墳丘裾に造られたものと考えられる。掘り込みの平面形態は楕円形で、長径1.23m、短径0.82mを測る。主軸方位は東西方向である。壁は斜めに立ち上がり、確認面からの深さは30cmを測る。

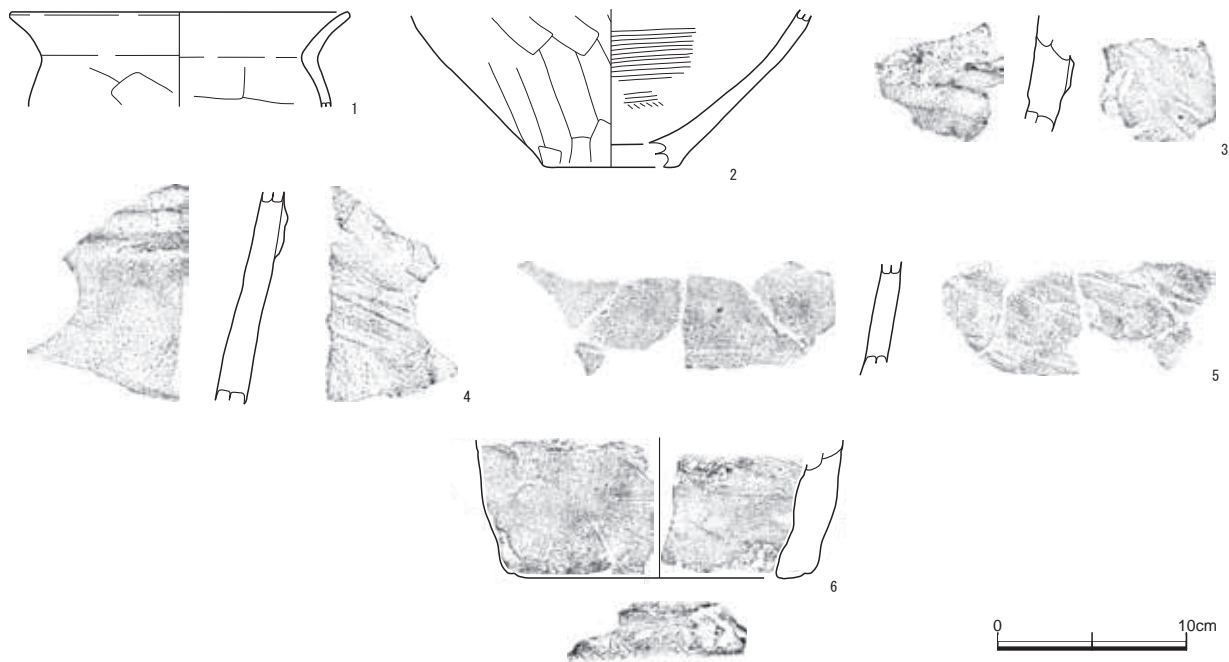
埴輪棺は、2条突帯の第29図1と3条突帯の第30図3が、口縁を向かい合わせて横に置かれ、3条突帯の第29図2の破片によって両側が閉塞される構造である。3個体とも残存率は高い。

第29図1は口径27.8cm、器高40.8cm、底径12.0cmを測り、胎土に白・赤・黒色粒、角閃石、砂礫を含む。焼成は普通、色調は橙色を呈し、残存率は95%である。外面はタテハケ、内面はタテ・ナナメ・ヨコハケ、タテナデが施される。突帯はM字形、ハケメは6本/cmである。2は口径27.6cm、器高50.1cm、底径16.5cmを測り、胎土に白・赤・黒色粒、角閃石、砂礫を含む。焼成は普通、色調は橙色を呈し、残存率は90%である。外面はタテハケ、内面はナナメ・ヨコハケ、タテナデが施される。突帯はM字形、ハケメは7本/cmである。第30図3は口径32.5cm、器高49.6cm、推定底径17.6cmを測り、胎土に白・赤・黒色粒、角閃石、砂礫を含む。焼成は普通、色調は橙色を呈し、残存率は95%である。外面はタテハケ、内面はタテ・ナナメ・ヨコハケ、タテナデが施される。突帯はM字形、ハケメは7本/cmである。

遺構の時期は、古墳時代後期前葉と推定される。



第21図 第1号古墳跡



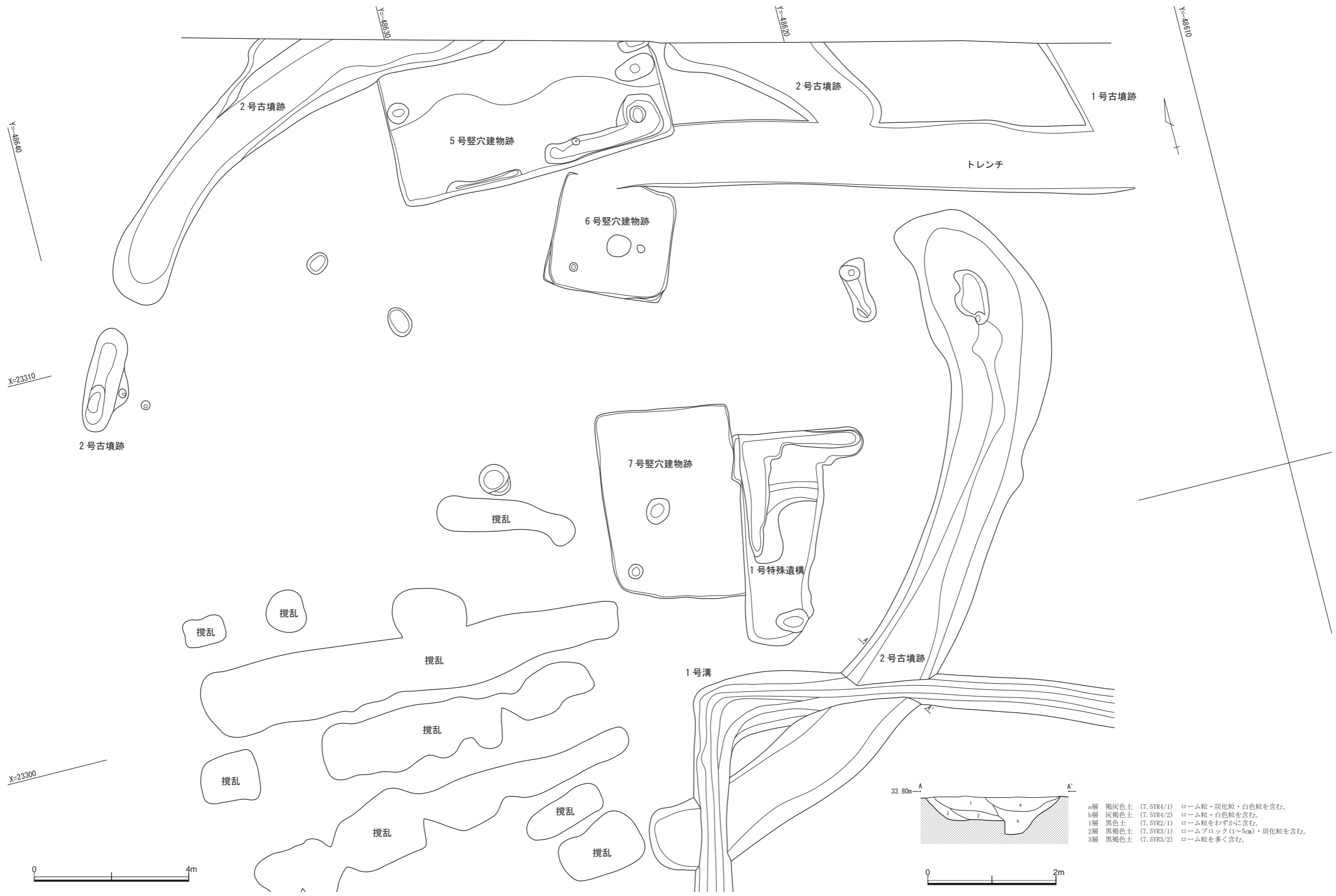
第22図 第1号古墳跡出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	H	甕	(17.8)	-	-	ABCE	普	暗褐	5%	
2	H	甕	-	-	(7.0)	ABCEHI	普	赤褐	10%	
3		円筒埴輪	-	-	-	ABCEH	普	橙		ハケメ4本/cm
4		円筒埴輪	-	-	-	ABCEH	普	橙		ハケメ8本/cm
5		円筒埴輪	-	-	-	ABCEH	普	橙		ハケメ7本/cm
6		円筒埴輪	-	-	(16.0)	ABCEH	普	橙		ハケメ7本/cm

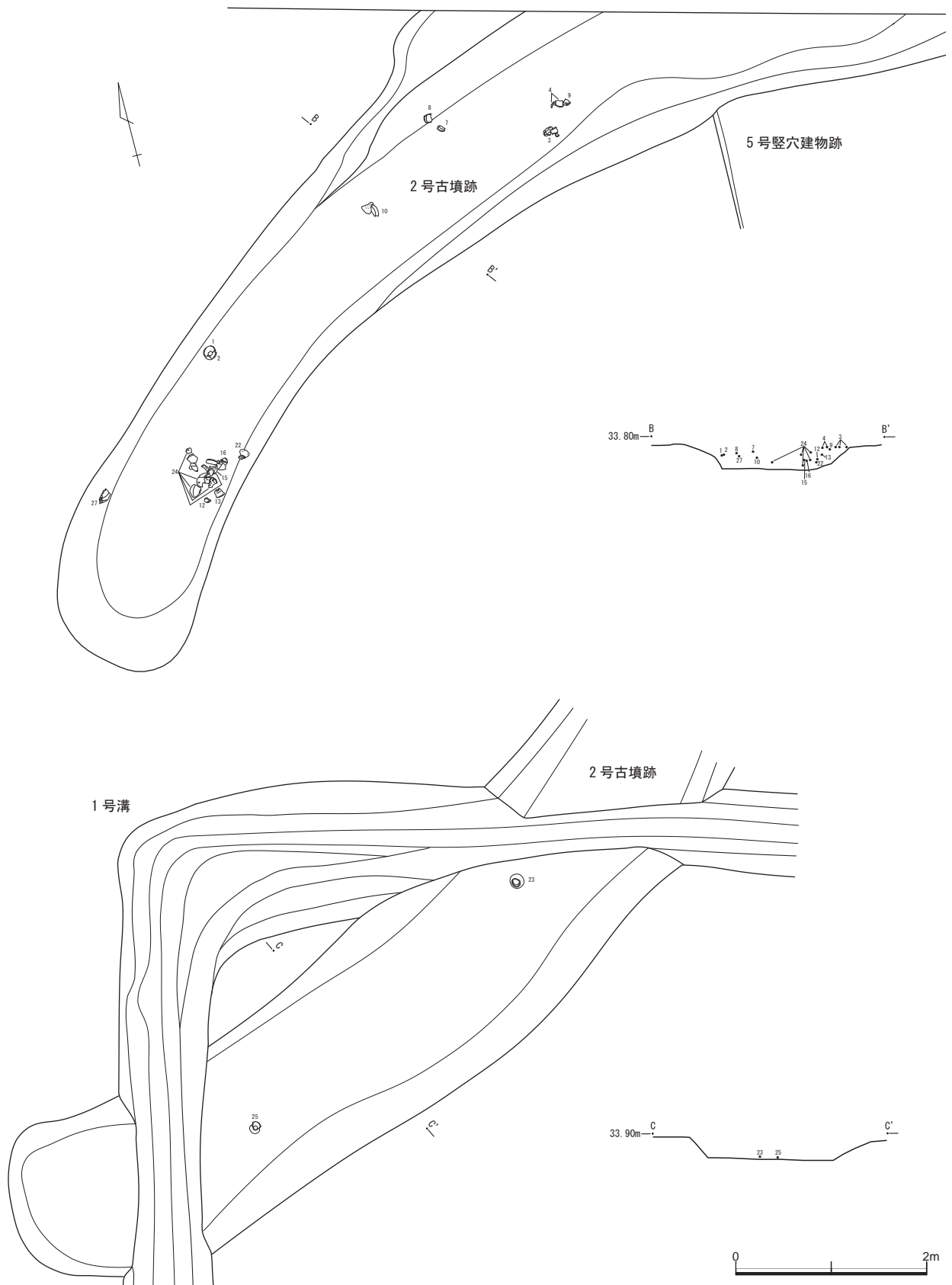
第9表 第1号古墳跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	H	坏	(11.3)	(3.0)	-	ABCE	普	にぶい橙	25%	
2	H	坏	(12.0)	(3.7)	-	ABCE	普	橙	30%	
3	H	坏	13.2	(4.7)	-	ABCEH	普	橙	80%	
4	H	坏	(11.4)	4.0	-	ABCE	普	橙	50%	
5	H	坏	12.2	4.1	-	ABCE	普	橙	60%	
6	H	坏	(12.0)	4.1	-	ABCE	普	橙	30%	
7	H	坏	(13.6)	3.3	-	ABCE	普	橙	30%	
8	H	坏	(14.0)	-	-	ABCEH	普	橙	20%	
9	H	坏	(14.0)	(3.9)	-	ABCEH	普	橙	25%	
10	H	坏	(13.6)	(3.5)	-	ABCH	普	暗褐	30%	
11	H	坏	11.0	7.6	-	ABCE	普	暗橙	95%	
12	H	坏	(18.0)	-	-	ABCE	普	赤褐	20%	
13	H	高坏	(19.9)	-	-	ABCE	普	赤褐	10%	
14	H	高坏	-	-	-	ABCEI	普	橙	10%	
15	H	高坏	-	-	-	ABCE	普	橙	25%	
16	H	高坏	-	-	-	ABCE	普	橙	25%	
17	H	高坏	-	-	-	ABCE	普	橙	20%	
18	H	高坏	-	-	-	ABCE	普	橙	25%	

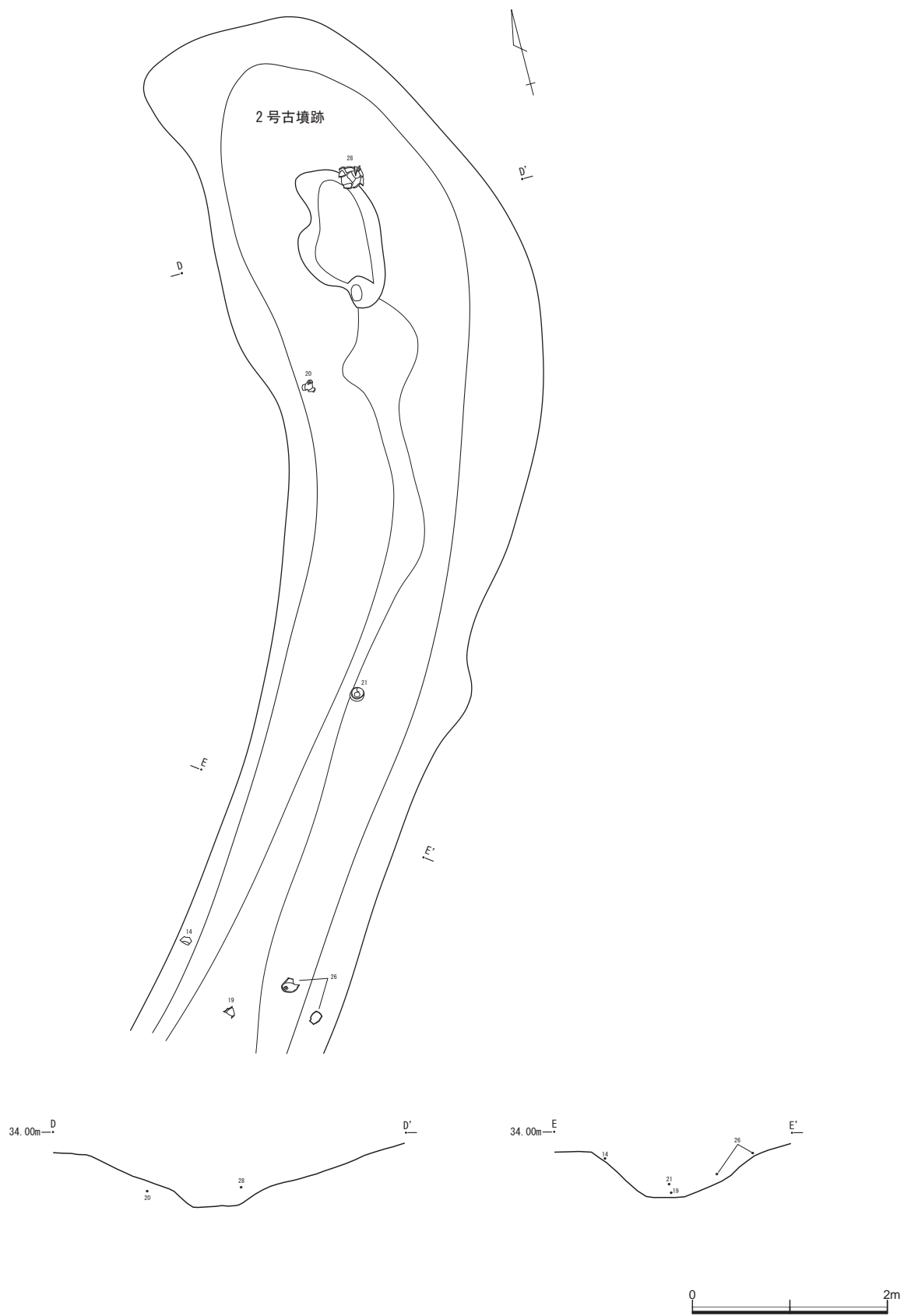
第10表 第2号古墳跡出土遺物観察表(1)



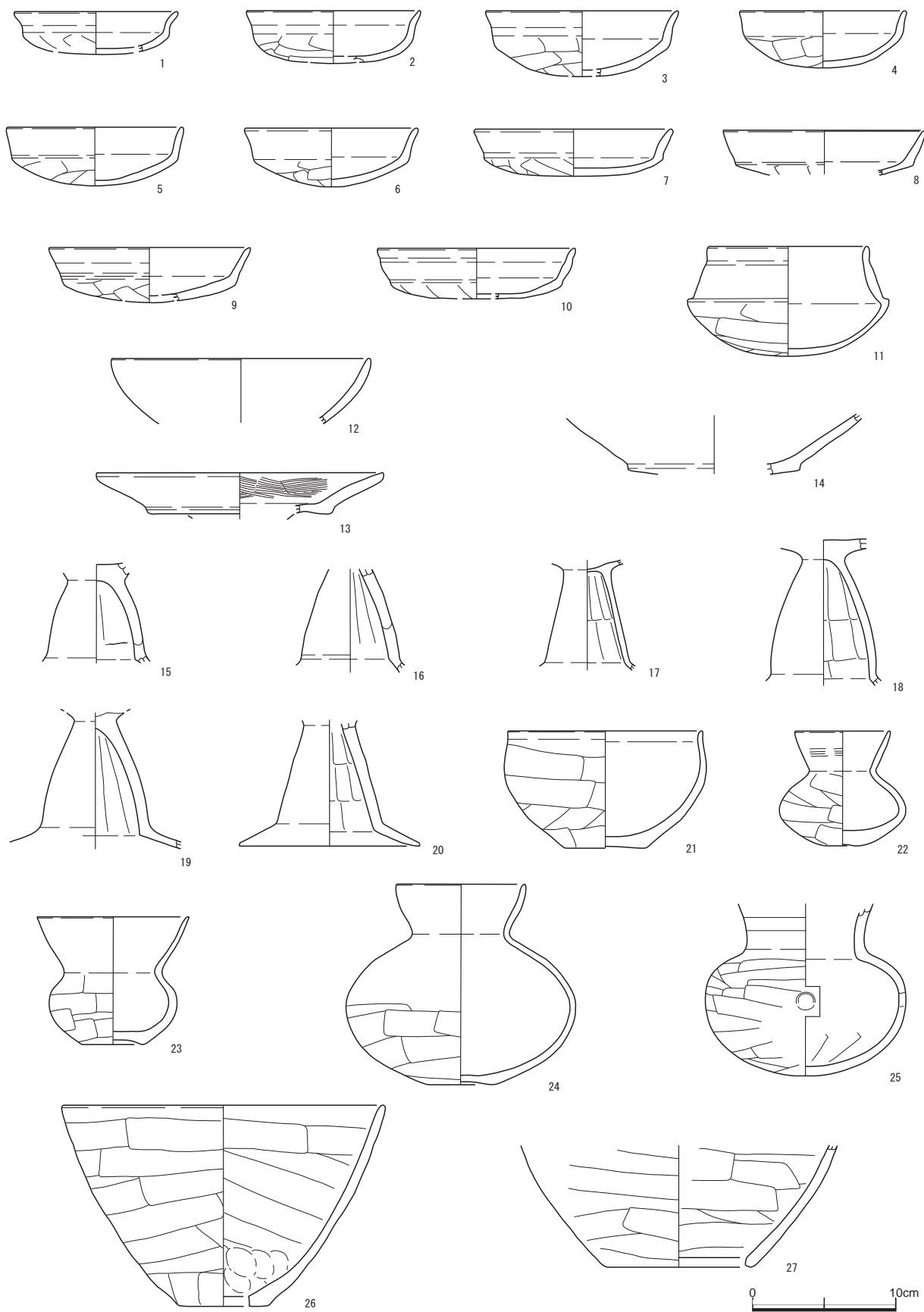
第23図 第2号古墳跡



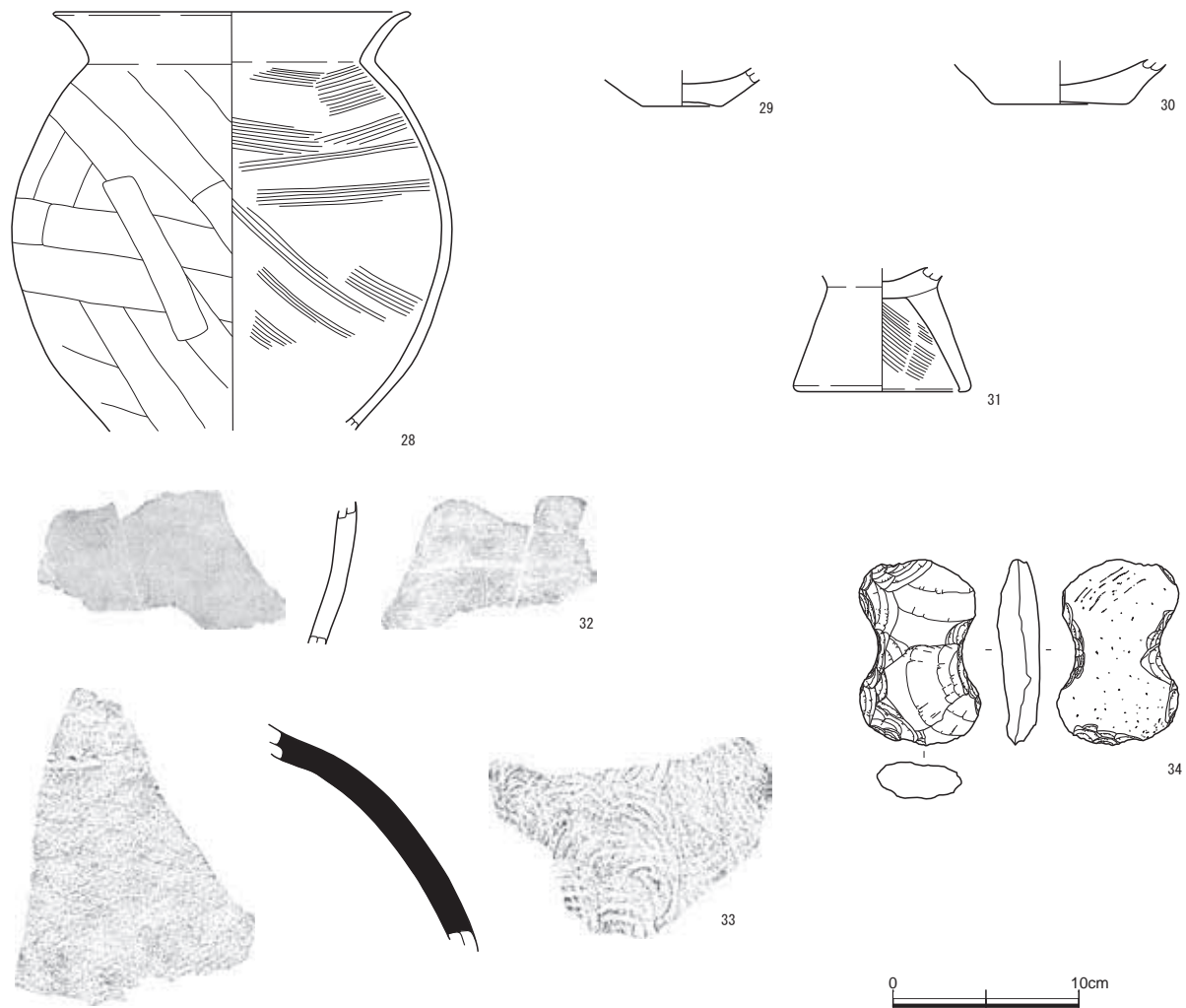
第24图 第2号古墳跡遺物出土狀況（1）



第25図 第2号古墳跡遺物出土状況(2)



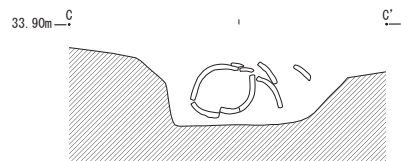
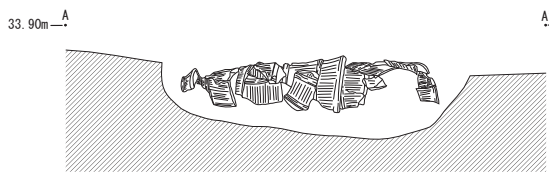
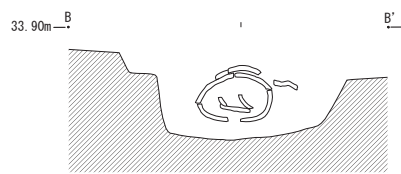
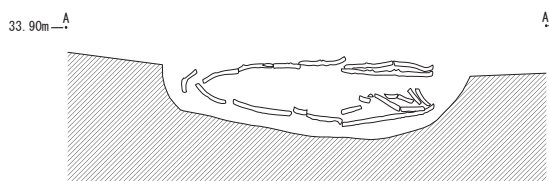
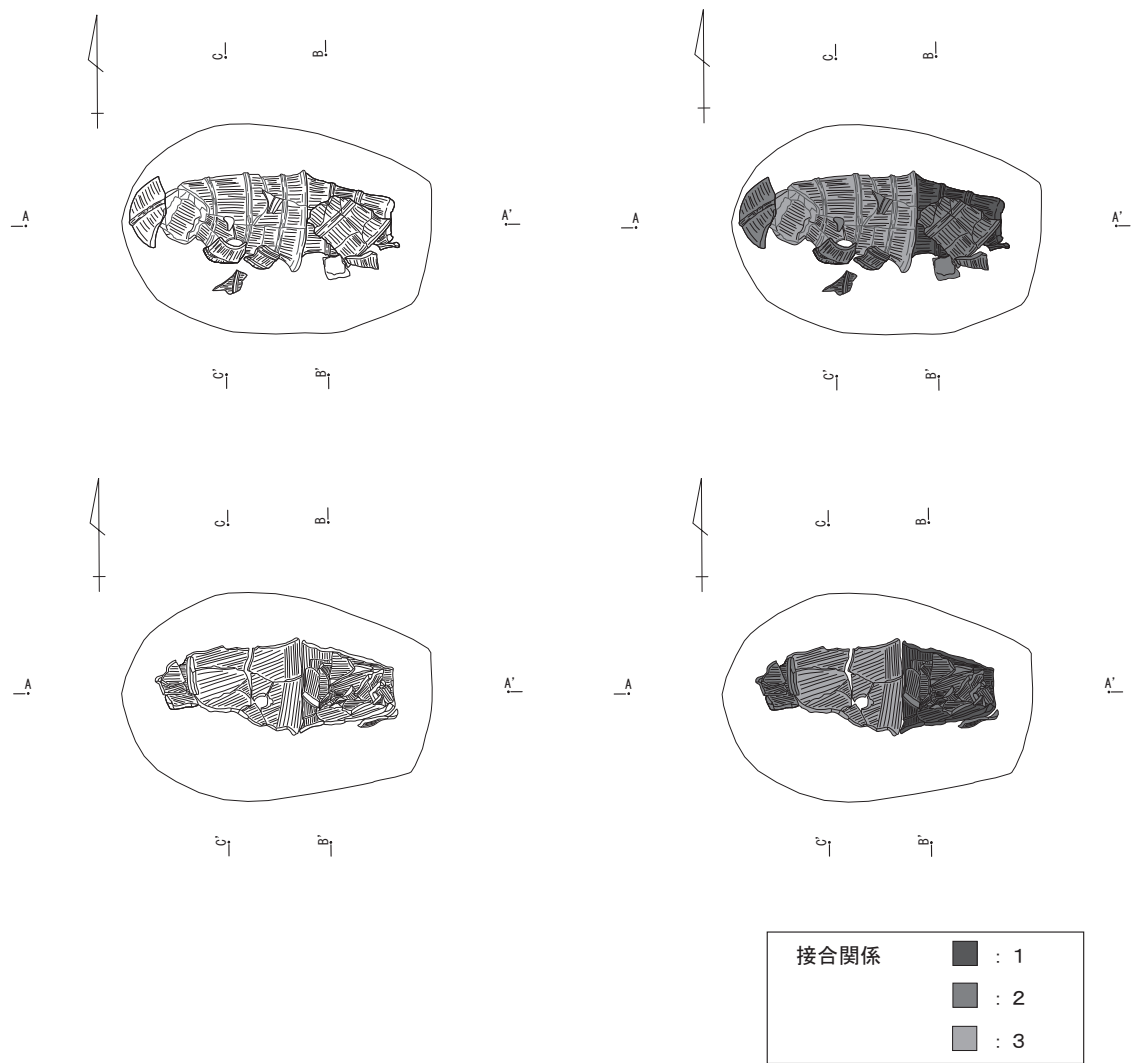
第 26 图 第 2 号古墳跡出土遺物 (1)



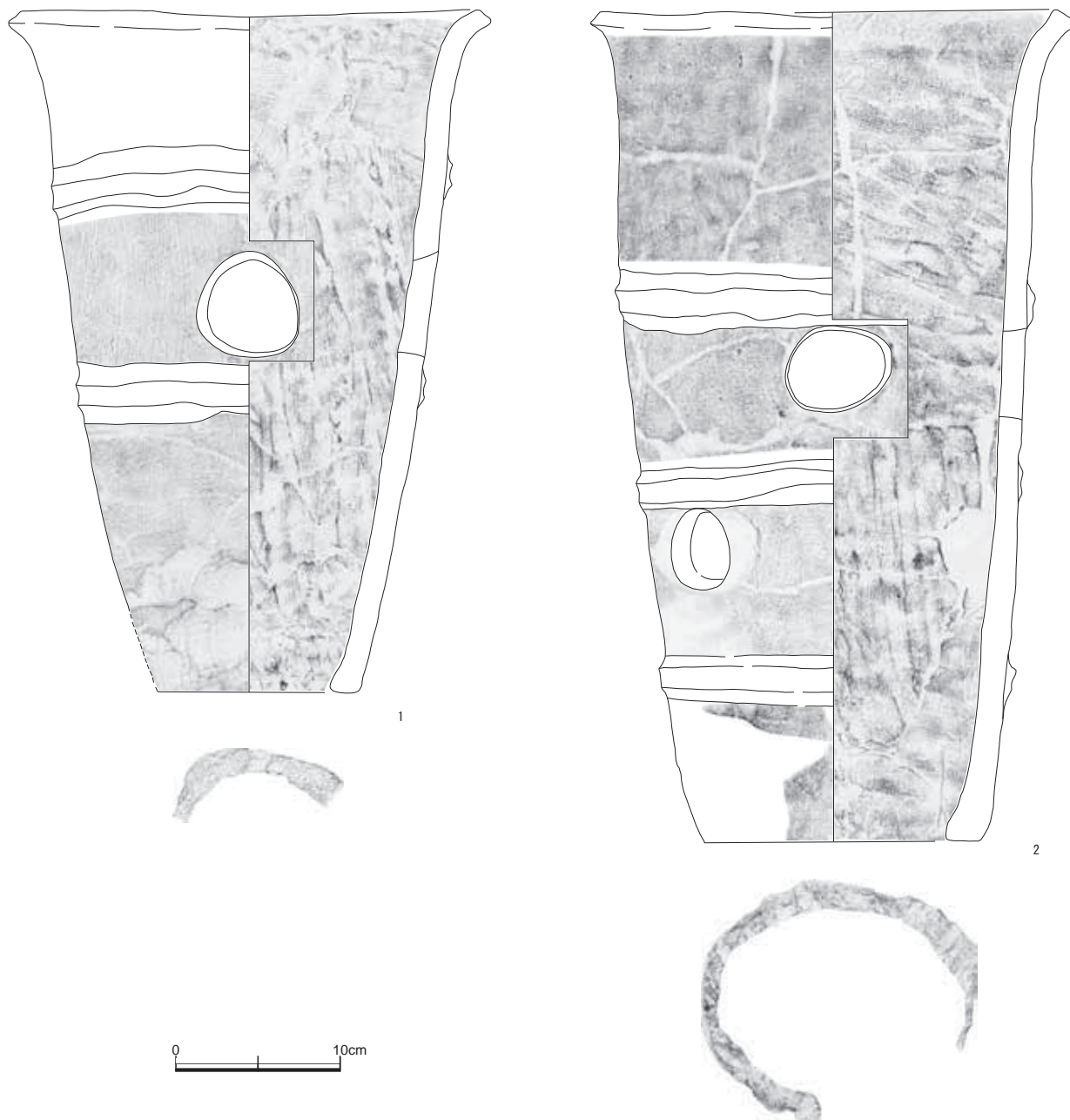
第 27 図 第 2 号古墳跡出土遺物 (2)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
19	H	高坏	-	-	-	ABCE	普	橙	30%	
20	H	高坏	-	-	12.4	ABCEI	普	橙	40%	
21	H	椀	13.5	8.2	5.5	ABCEH	普	橙	95%	
22	H	坏	(6.6)	8.0	1.8	ABCE	普	橙	80%	
23	H	埴	(6.6)	8.0	2.8	ABCEFI	良	にぶい橙	75%	
24	H	埴	8.9	14.0	4.8	ABCHI	普	橙	90%	
25	H	甗	-	-	-	ABCE	普	にぶい橙	70%	
26	H	甗	(21.2)	14.0	6.0	ABCEHI	普	橙	75%	
27	H	甗	-	-	(10.0)	ABCE	普	黒褐	15%	
28	H	甗	18.9	-	-	ABCEHI	良	赤褐	60%	
29	H	甗	-	-	4.4	ABCE	普	にぶい橙	5%	
30	H	甗	-	-	7.2	ABCEHI	普	にぶい橙	5%	
31	H	台付甗	-	-	(9.0)	ABCEH	普	白橙	15%	
32		埴輪	-	-	-	ABCE	普	橙		ハケメ 6 本 / cm
33	S	甗	-	-	-	ACH	良	青灰	-	
34		打製石斧	長 10.0	幅 6.2	幅 2.2					凝灰岩製

第 11 表 第 2 号古墳跡出土遺物観察表 (2)



第28図 第1号埴輪棺墓



第29図 第1号埴輪棺墓出土遺物（1）

6 溝

第1号溝（第31図、第34図1～5、第12表）

調査区南半に位置し、第1～3号竪穴建物跡、第2号古墳跡を切る。東西方向に走り、調査区ほぼ中央で南へ直角に曲がる。主軸方位はN-75°-W、N-15°-Eである。幅30～50cm、確認面からの深さは60～70cmを測る。断面形態は逆台形又は逆三角形に

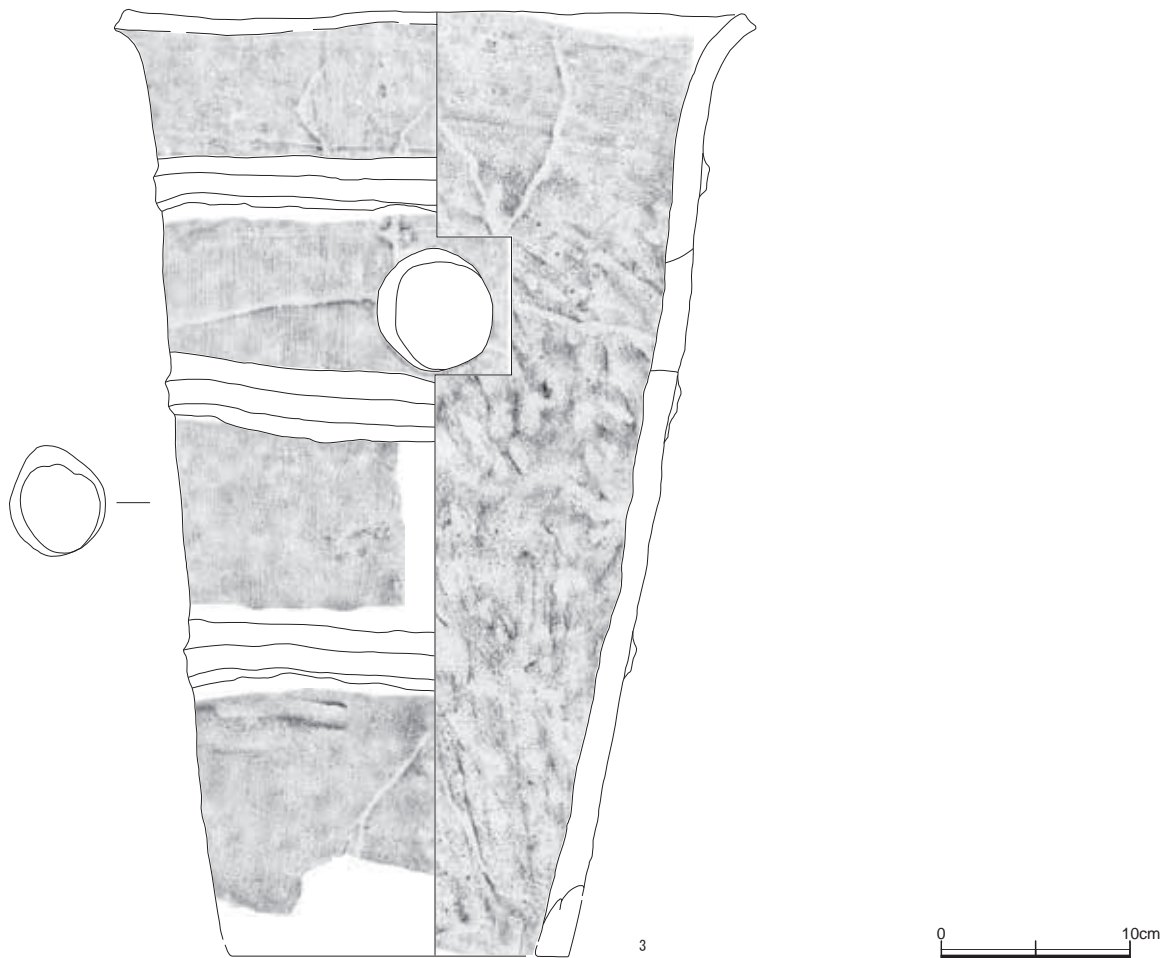
近く、一部段を有する箇所も認められる。掘り直されている可能性が考えられる。

図示できた遺物は、第34図1～5である。1は壺、2～4は須恵器坏、5は須恵器甕である。

遺構の時期は、平安時代以降と推定される。

第2号溝（第33図、第34図6・7、第12表）

調査区北西のトレンチ部分に位置する。東西方向



第30図 第1号埴輪棺墓出土遺物(2)

に走り、主軸方位はN-75°-Wである。幅2.1m、確認面からの深さは1.05mを測る。断面形態は逆三角形を呈する。噴砂により切られる状況が認められた。

図示できた遺物は、第34図6・7である。6は台付甕、7は甕である。

第3号溝 (第32図)

調査区西部に位置する。南北方向に走り、第4号溝と並行する。主軸方位は、ほぼ正方位である。幅40cm、確認面からの深さは5~15cmを測る。断面形態は箱形である。

図示できる遺物は出土しなかった。

第4号溝 (第32図)

調査区西部に位置する。南北方向に走り、第3号

溝と並行する。主軸方位は、ほぼ正方位である。幅30cm、確認面からの深さは20cmを測る。断面形態は箱形である。

図示できる遺物は出土しなかった。

第5号溝 (第32図)

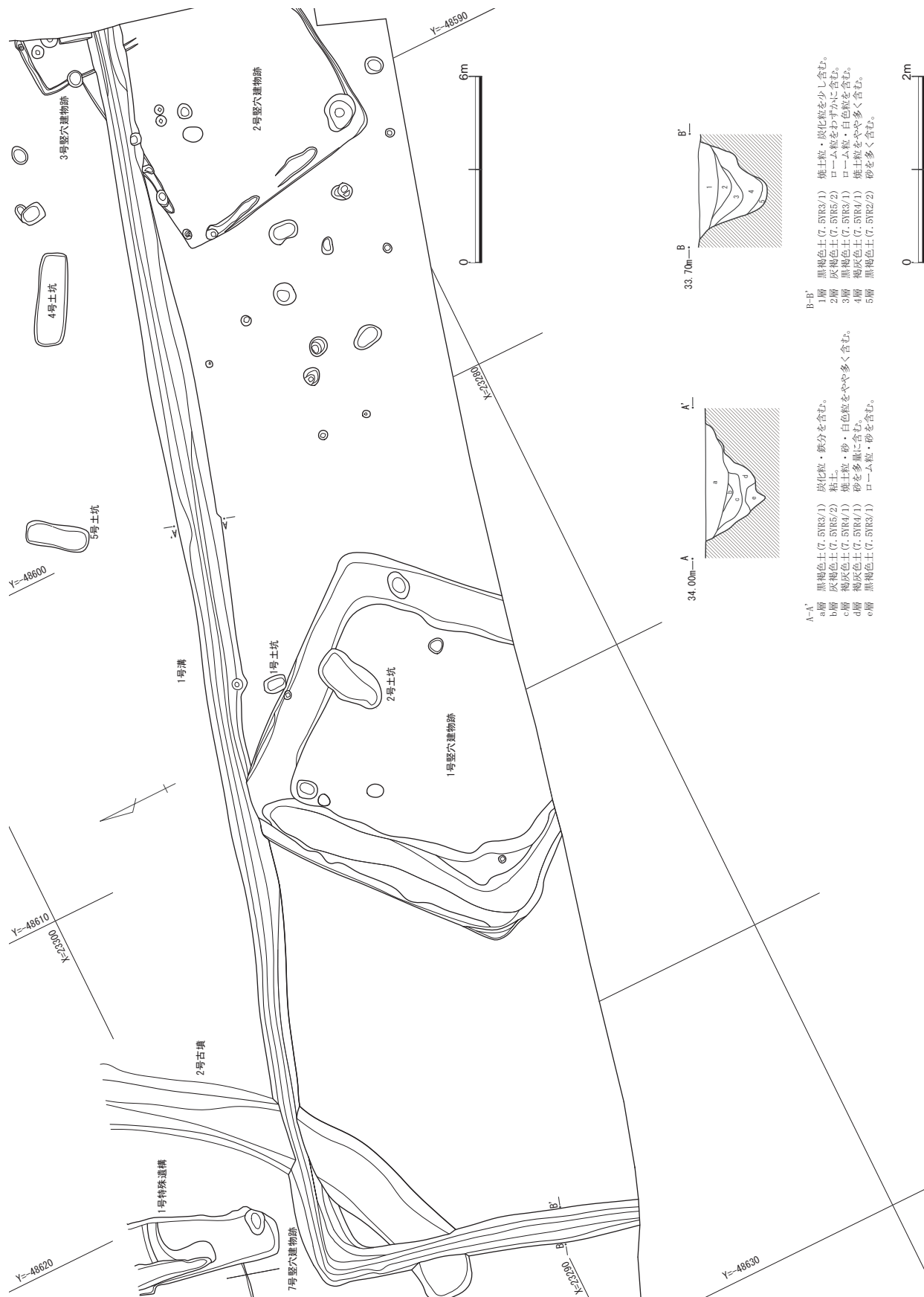
調査区西部に位置し、断続的に確認された。主軸方位はN-10°-Eである。幅は約20cm、確認面からの深さは約5cmを測る。壁は斜めに立ち上がる。

図示できる遺物は出土しなかった。

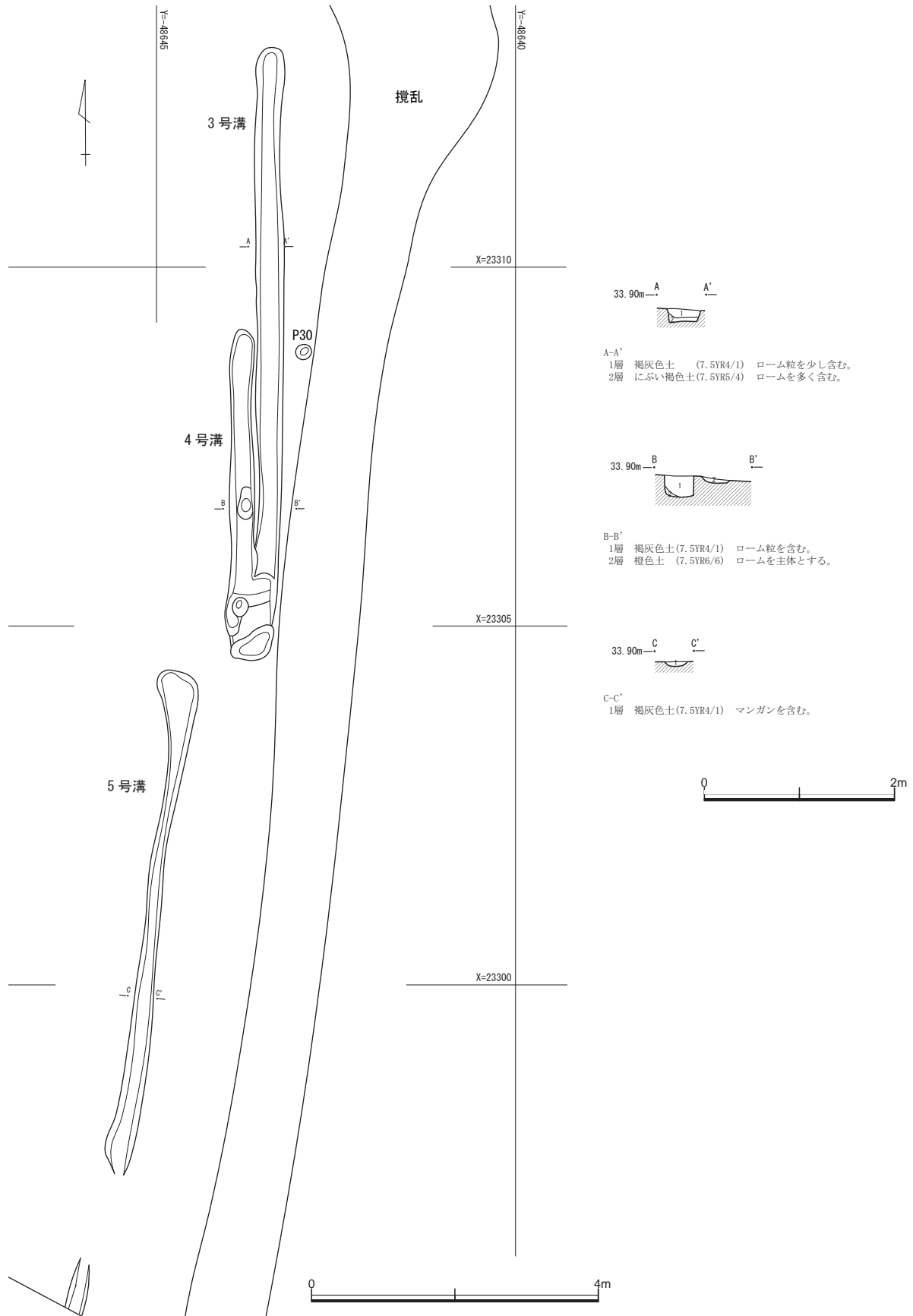
7 土坑

第1号土坑 (第35図)

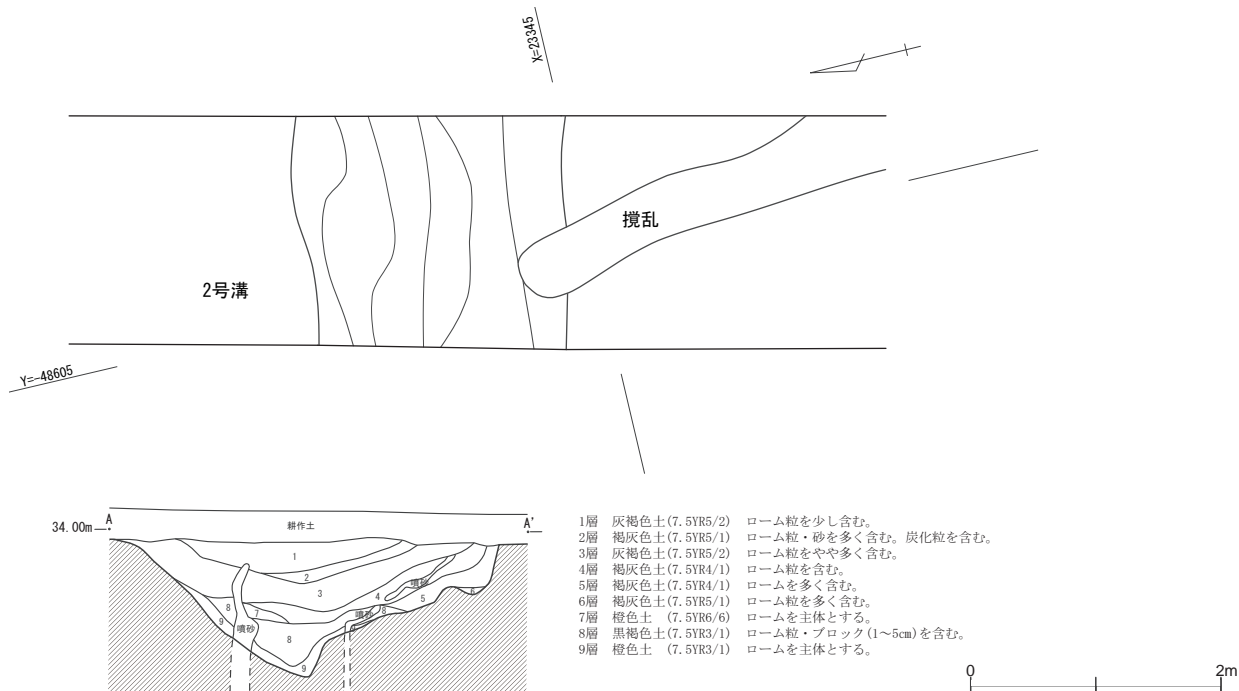
調査区南部に位置し、第1号竪穴建物跡を切る。平



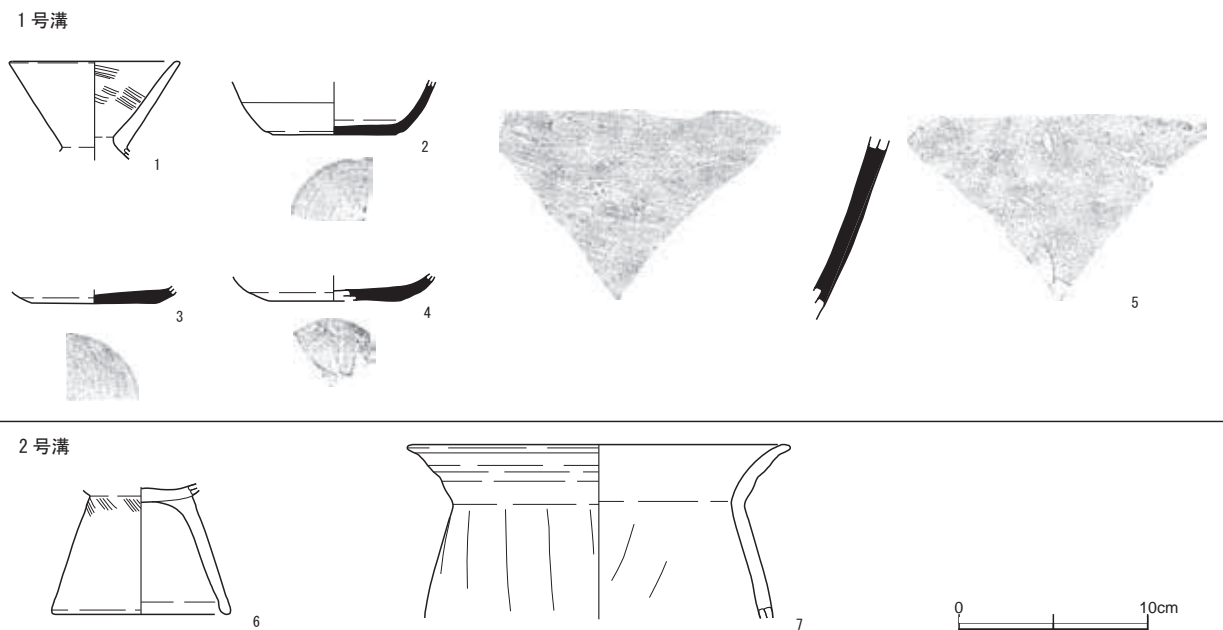
第31図 第1号溝



第32図 第3~5号溝



第33図 第2号溝



第34図 第1・2号溝出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
SD1 1	H	坩	(9.0)	-	-	ABCEH	普	橙	15%	
2	S	坏	-	-	(6.6)	ACG	良	青灰	20%	
3	S	坏	-	-	(6.8)	ACGH	良	青灰	15%	
4	S	坏	-	-	(6.8)	ACFH	普	灰	15%	
5	S	甕	-	-	-	ACFI	良	青灰	-	
SD2 6	H	台付甕	-	-	9.4	ABCEHI	普	橙	15%	
7	H	甕	(20.2)	-	-	ABCEH	普	暗橙	10%	

第12表 第1・2号溝出土遺物観察表

面形態は楕円形で、長径70cm、短径50cmを測る。主軸方位は、ほぼ正方位である。確認面からの深さは15cmで、壁は南側がほぼ垂直に、北側が斜めに立ち上がる。覆土には、多量の礫が含まれていた。

図示できる遺物は出土しなかった。

第2号土坑 (第35図、第37図1・2、第13表)

調査区南部に位置し、第1号竪穴建物跡を切る。平面形態は楕円形で、長径2.3m、短径1.2mを測る。主軸方位はN-60°-Eである。確認面からの深さは15cmで、壁は斜めに立ち上がる。覆土には、多量の礫が含まれていた。

図示できた遺物は、第37図1・2である。1は甕

の底部、2は須恵器甕である。

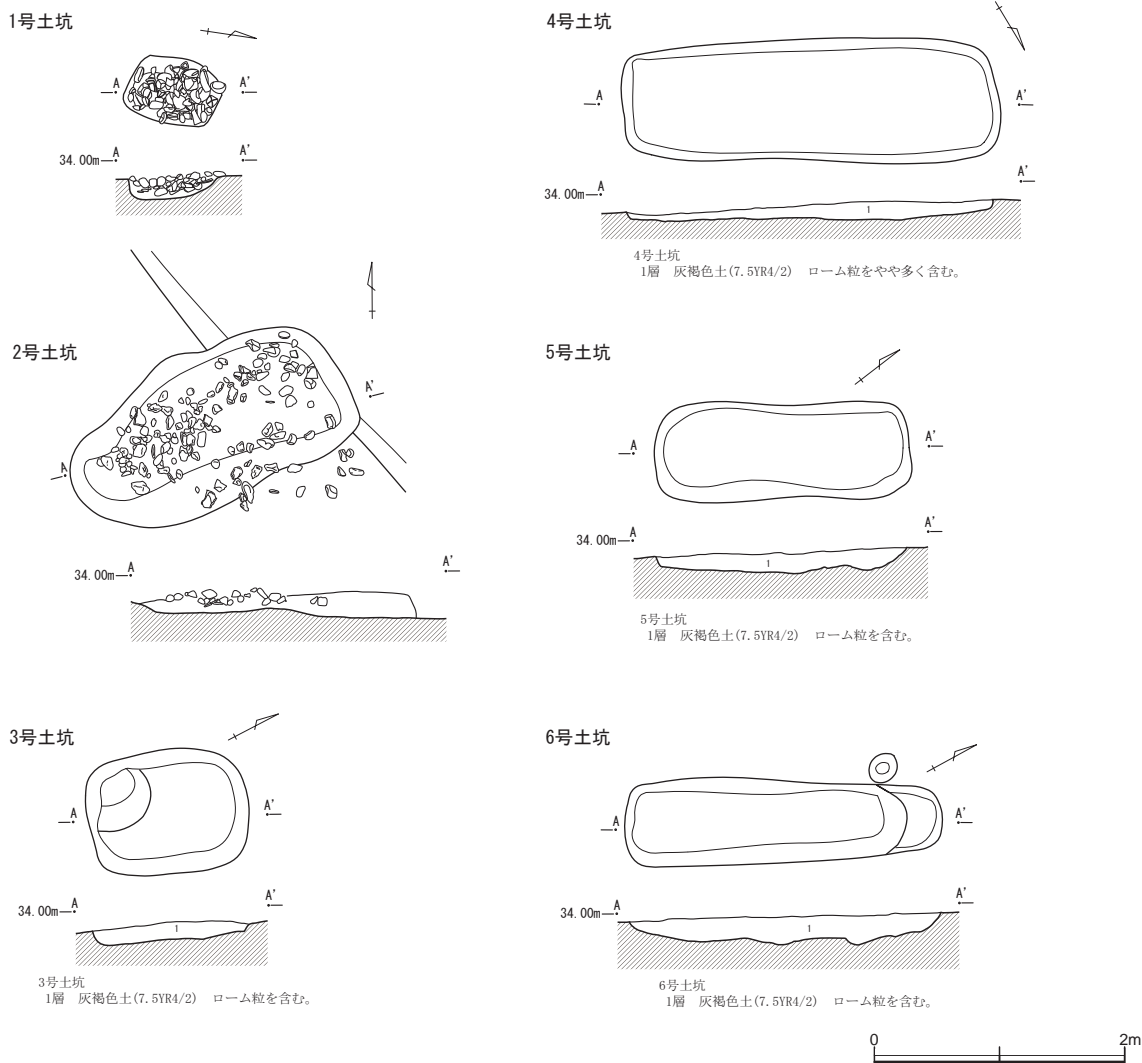
第3号土坑 (第35図)

調査区東部に位置する。平面形態は長方形で、長軸1.3m、短軸1.0mを測る。主軸方位はN-25°-Eである。確認面からの深さは10cmで、壁は斜めに立ち上がる。

図示できる遺物は出土しなかった。

第4号土坑 (第35図)

調査区東部に位置する。平面形態は長方形で、長軸3.0m、短軸1.0mを測る。主軸方位はN-60°-Wである。確認面からの深さは10cmで、壁はほぼ垂直



第35図 土坑実測図(1)

に立ち上がる。

図示できる遺物は出土しなかった。

第5号土坑 (第35図)

調査区東部に位置する。平面形態は長方形で、長軸2.0 m、短軸0.8 mを測る。主軸方位はN-35°-Eである。底面はやや凹凸がある。確認面からの深さは15cmで、壁は斜めに立ち上がる。

図示できる遺物は出土しなかった。

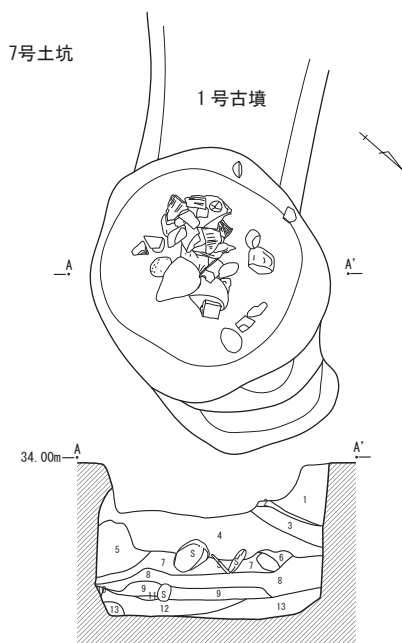
第6号土坑 (第35図)

調査区中央部に位置する。平面形態は長方形で、長軸2.5 m、短軸0.7 mを測る。主軸方位はN-25°-Eである。底面はやや凹凸がある。確認面からの深さは20cmで、壁は斜めに立ち上がる。

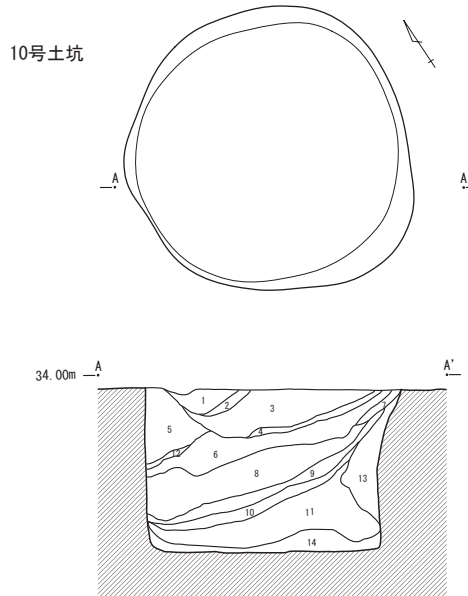
図示できる遺物は出土しなかった。

第7号土坑 (第36図、第37図3・4、第13表)

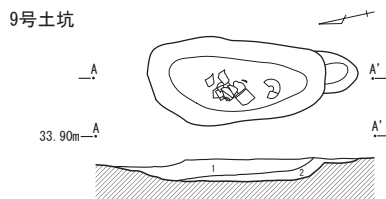
調査区東部に位置し、第1号古墳跡を切る。平面形態は円形で、直径1.9 mを測る。確認面からの深さは



- 7号土坑
- 1層 黄橙色土 (7.5YR7/8) ロームを主体とする。褐灰色土ブロックを含む。
 - 2層 褐灰色土 (7.5YR4/1) ローム粒を少し含む。
 - 3層 黄橙色土 (7.5YR7/8) ロームを主体とする。
 - 4層 褐灰色土 (7.5YR4/1) 砂を多く含む。
 - 5層 にぶい橙色土 (7.5YR6/3) 砂を含む。
 - 6層 灰褐色土 (7.5YR6/2) 砂・褐灰色土ブロックを含む。
 - 7層 黒褐色土 (7.5YR3/1) ローム粒・砂を含む。
 - 8層 明褐灰色土 (7.5YR7/2) 鉄分を含む。
 - 9層 褐灰色土 (7.5YR5/1) 砂を含む。
 - 10層 にぶい橙色土 (7.5YR6/2) 砂を含む。
 - 11層 灰褐色土 (7.5YR6/2) 砂を含む。
 - 12層 褐灰色土 (7.5YR5/1) 砂を含む。
 - 13層 明褐灰色土 (7.5YR7/2) 砂を含む。



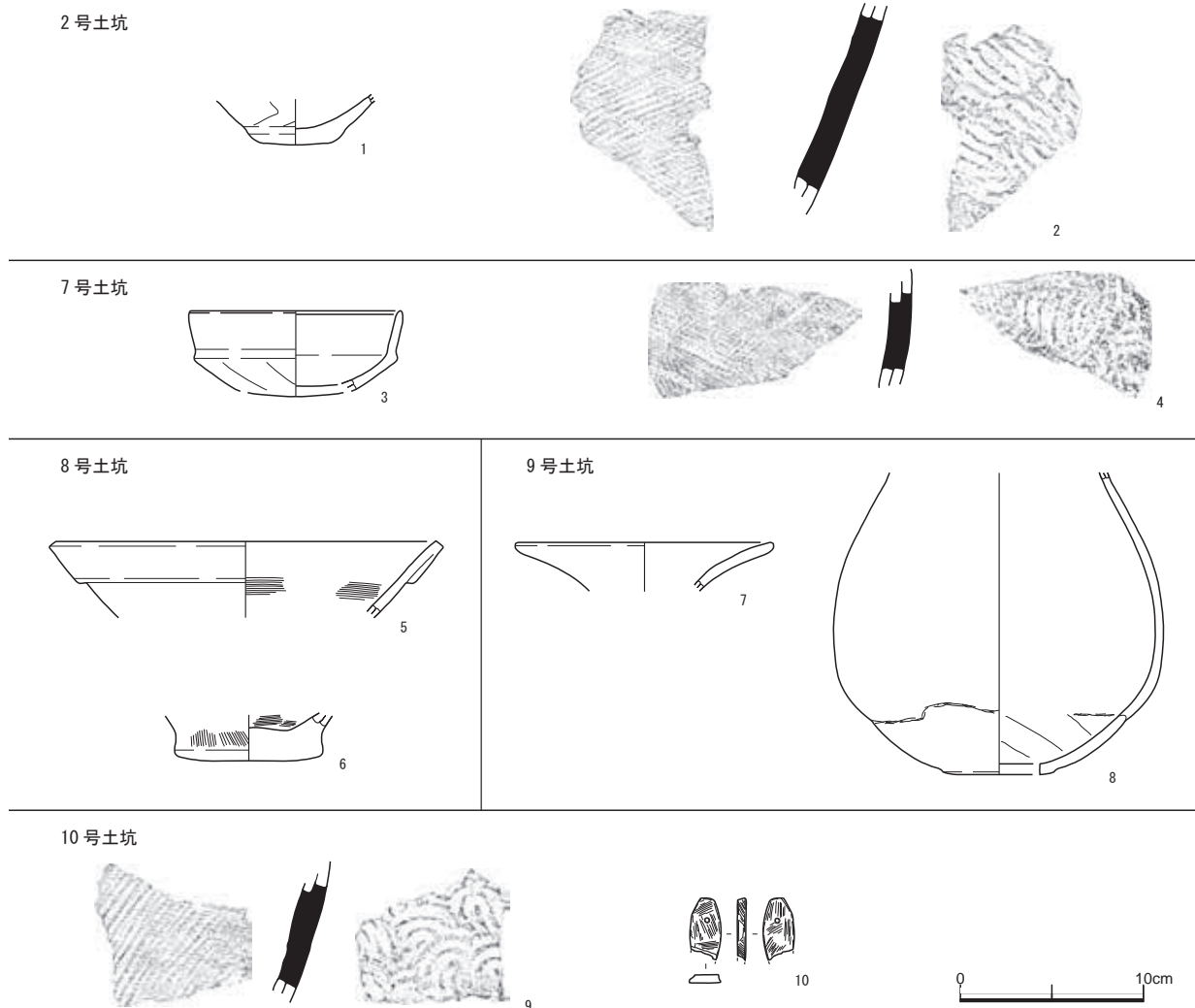
- 10号土坑
- 1層 黒褐色土 (7.5YR3/1) ローム粒・焼土粒をわずかに含む。
 - 2層 にぶい褐色土 (7.5YR4/1) ロームを多く含む。
 - 3層 黒褐色土 (7.5YR7/8) ローム粒・焼土粒を含む。
 - 4層 黒色土 (7.5YR4/1) ローム粒を少し含む。
 - 5層 橙色土 (7.5YR6/3) ロームを主体とする。
 - 6層 褐灰色土 (7.5YR6/2) 砂・礫(1~5cm)を主体とする。
 - 7層 黒褐色土 (7.5YR3/1) ローム粒を少し含む。
 - 8層 褐色土 (7.5YR7/2) 砂を含む。
 - 9層 黒色土 (7.5YR5/1) 砂を含む。
 - 10層 灰褐色土 (7.5YR6/2) 砂を含む。
 - 11層 黒褐色土 (7.5YR6/2) 砂を含む。
 - 12層 褐灰色土 (7.5YR5/1) 砂を含む。
 - 13層 橙色土 (7.5YR7/2) ロームを主体とする。
 - 14層 灰褐色土 (7.5YR6/2) 砂を含む。粘土質。



- 9号土坑
- 1層 黒色土 (7.5YR2/1) ローム粒・炭化粒を少し含む。
 - 2層 黒褐色土 (7.5YR3/1) ローム粒を多く含む。



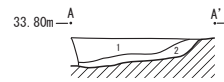
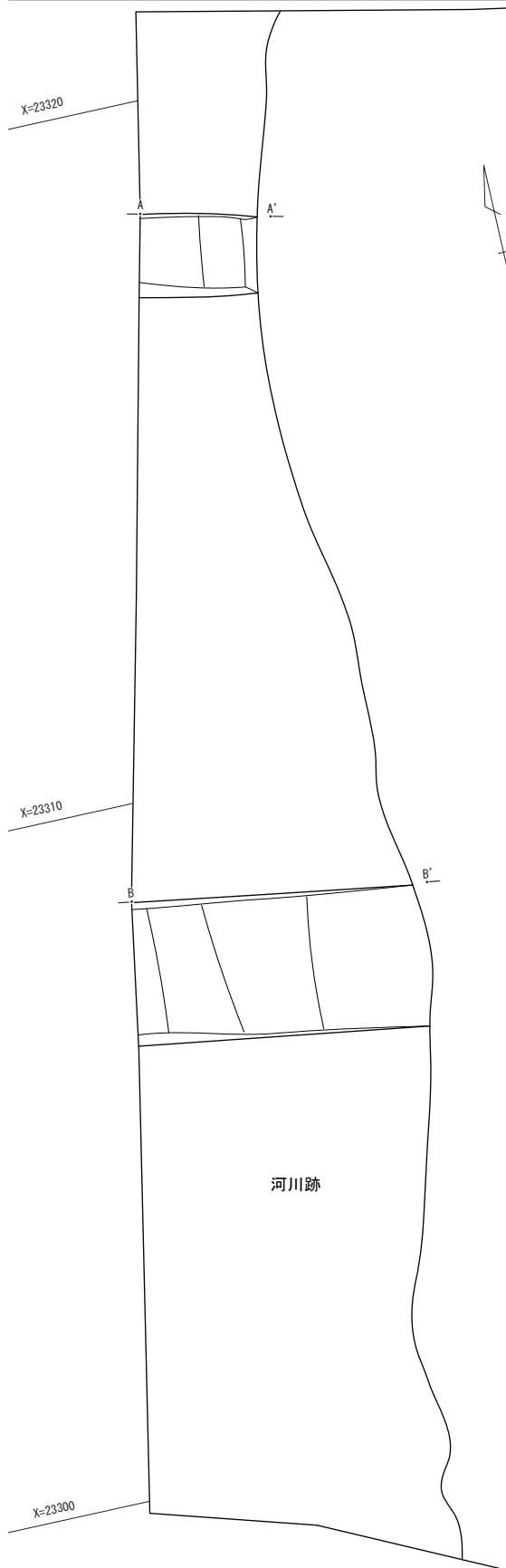
第36図 土坑実測図(2)



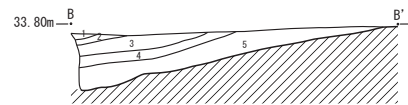
第 37 図 土坑出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
SK2 1	H	甕	-	-	4.0	A B C H	普	橙	5%	
2	S	甕	-	-	-	A C F H	普	灰	-	
SK7 3	H	坏	(11.4)	(4.6)	-	A B C E	普	橙	20%	
4	S	甕	-	-	-	A C H	良	青灰	-	
SK8 5	H	甕	(20.6)	-	-	A B C E H	普	橙	5%	
6	H	甕	-	-	8.0	A B C D E H	普	橙	5%	
SK9 7	H	壺	14.0	-	-	A B C E H I	普	橙	5%	
8	H	甌	-	-	6.0	A B C E	普	橙	75%	
SK10 9	S	甕	-	-	-	A C F H	良	灰	-	
10		石製模造品	長 -	幅 1.7	厚 0.5					滑石製

第 13 表 土坑出土遺物観察表



- A-A'
- 1層 褐灰色土 (7.5YR4/1) 酸化鉄を多く含む。
 - 2層 にぶい褐色土(7.5YR6/3) 酸化鉄を多く含む。



- B-B'
- 1層 黒色土 (7.5YR2/1) 酸化鉄を含む。
 - 2層 褐灰色土(7.5YR5/1) 火山灰 (浅間Bと思われる)
 - 3層 黒色土 (7.5YR2/1) 炭化粒を含む。
 - 4層 灰褐色土(7.5YR5/2) 酸化鉄を多く含む。
 - 5層 褐灰色土(7.5YR4/1) 酸化鉄を多く含む。



第38図 河川跡

1.2 mで、壁はほぼ垂直に立ち上がるか、一部オーバーハングする。

図示できた遺物は、第37図3・4である。3は坏、4は須恵器甕である。

第8号土坑 (第12図、第37図5・6、第13表)

調査区東部に位置し、第4号竪穴建物跡、第1号古墳跡を切る。平面形態は円形で、直径1.8 mを測る。底面は中央が深く皿状である。確認面からの深さは90cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

図示できた遺物は、第37図5・6である。共にハケメが施された甕で、5は複合口縁部、6は底部である。

第9号土坑 (第36図、第37図7・8、第13表)

調査区南北部に位置する。平面形態は楕円形で、長径1.65 m、短径0.7 mを測る。主軸方位はN-10°-Eである。確認面からの深さは15cmで、壁は斜めに立ち上がる。

図示できた遺物は、第37図7・8である。共に壺と思われる。

第10号土坑 (第36図、第37図9・10、第13表)

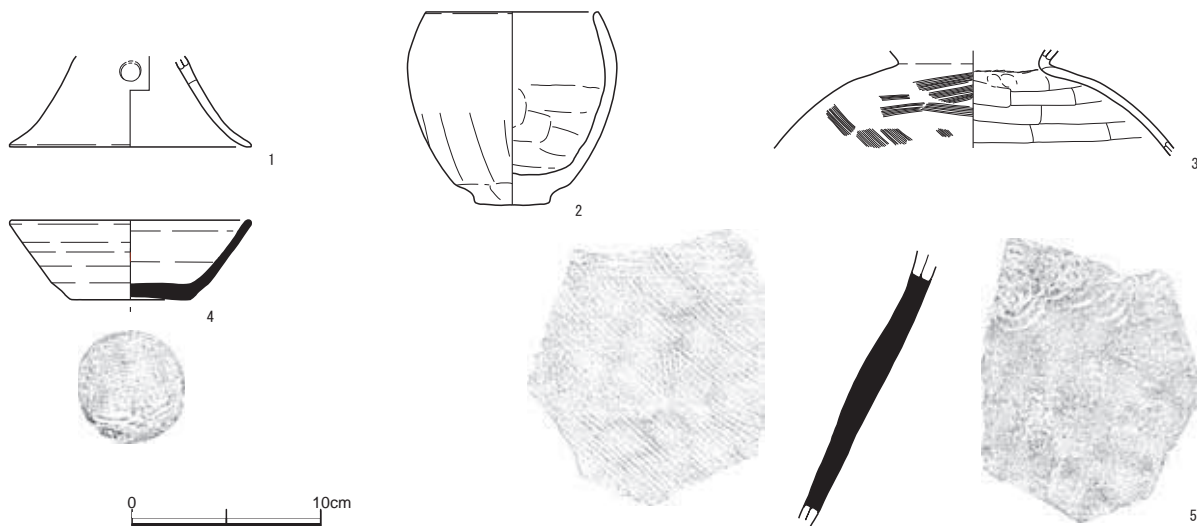
調査区東部に位置する。平面形態は円形で、直径2.2 mを測る。確認面からの深さは1.3 mで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

図示できた遺物は、第37図9・10である。9は須恵器甕、10は滑石製模造品である。

8 河川跡

第38図に示した。調査区西端に位置する。南に当たる埼玉県埋蔵文化財調査事業団の調査によれば、幅約30 mの河川跡である。今回確認されたのは、その東側の立ち上がり部分である。確認面からの深さは、70cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。



第39図 ピット出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	H	高坏	-	-	12.7	ABCEH	良	橙	30%	
2	H	鉢	(9.0)	(10.2)	3.6	ABCEH	普	赤褐	60%	
3	H	甕	-	-	-	ABCE	良	橙	10%	
4	S	坏	12.6	4.2	6.2	ACFH	良	灰	75%	
5	S	甕	-	-	-	ACFH	良	青灰	-	

第14表 ピット出土遺物観察表

IV 調査のまとめ

前章まで述べてきた通り、今回の調査では竪穴建物跡7棟、特殊遺構1基、古墳跡2基、埴輪棺墓1基、溝5条、土坑10基、河川跡1条等が確認された。

森下遺跡の範囲は東西に大きく広がるが、遺構が希薄な中央部を挟み、東西で様相が全く異なる。そのため、本来は別個の遺跡として捉えるべきものである。今回の調査区は、遺跡の東部、河川跡の東に広がる集落跡で、古墳時代後期には墓域となる。縄文時代後期初頭（称名寺Ⅱ式期）のものと思われる流木が、現地表面下約5mから出土したことから、古墳時代以降の遺構確認面は、2次堆積による砂混じりのローム、あるいは砂層であると考えられる。それ以前は、森下遺跡周辺の低地域には、深い谷が広がっていたものと考えられ、縄文時代の地形を考える上で、一つの手掛かりとなろう。集落は古墳時代前期に始まり、中期までは居住域、後期になると墓域となり、円墳、埴輪棺墓が造られている。

古墳時代前期の第1号竪穴建物跡は一辺10.1m、中期の第2・5号竪穴建物跡は一辺約7mを測り、大規模である。第1号竪穴建物跡から、駿河地方で生産された大廓式土器大型壺の搬入品が出土したことは特筆される。中期末頃の導入期のものと思われるカマドを持つ第5号竪穴建物跡や、竪穴掘削を途中で放棄し

たものとみられる第1号特殊遺構を最後に、一時居住域は移動する。

その後、墓域になり円墳が造られるが、その規模は直径20m程度である。周堀は全周しては確認されず、第1号古墳跡は一部直線的になるなど、課題は残る。遺物は、埴輪が破片で少量出土しただけで、第2号古墳跡からは土師器が多く出土した。

第1号古墳跡の墳丘裾部には、埴輪棺墓が造られている。深谷市内では、下手計西浦遺跡に次ぐ出土である。下手計西浦遺跡からは2基確認され、構成埴輪の全てが2条突帯のものである。一方森下遺跡のものは、2条突帯のもの1個体と3条突帯のもの2個体によって注目される。

奈良時代以降になると、竪穴建物跡、溝がみられる。溝の角度は、森下遺跡西部でみられる正方位の溝とは方位が異なっており、その方位は河川跡と同じである。河川により規制を受けた可能性が考えられる。

最後に改めて、この発掘調査に深いご理解とご協力を頂いた深谷市建設部集落排水課の方々をはじめ、森下遺跡の発掘作業、整理作業に携わり、文化財を記録保存して後世に残すことにご尽力頂いた皆様に敬意を表したい。

〈参考文献〉

- 栗岡 潤 2007 『白井沼遺跡Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第328集
劔持和夫 1995 『森下・戸森松原・起会』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第148集
知久裕昭 2005 『森下遺跡』 埼玉県深谷市埋蔵文化財調査報告書第73集
永井智教 1996 『下手計西浦遺跡』 埼玉県深谷市埋蔵文化財調査報告書第48集

付編 1

放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤茂・佐々木由香・丹生越子・廣田正史・
瀬谷薫・小林紘一・Zaur Lomtadze・
Ineza Jorjoliani

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

1. はじめに

埼玉県深谷市に位置する森下遺跡第2次調査より検出された自然木 1 点について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。試料の調製は廣田、瀬谷、Lomtadze、Jorjoliani が、測定は小林、丹生、伊藤が行い、本文は伊藤、佐々木が作成した。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表 1 のとおりである。試料は、調査区の地表面下約 5 m の砂～粘質土から出土した直径約 30 cm の樹皮付きの自然木 1 点である。樹種はクリで、木材の最外年輪から試料を採取した（樹種同定の詳細は樹種同定報告参照）。

3. 結果

表 2 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示し ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲を、図 1 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1 \sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年

表 1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-11729	遺跡名：森下遺跡第2次 層位：地表から約5 m下の砂～粘質土 試料：自然木（直径約30 cm）	試料の種類：生材（1年輪：クリ） 試料の性状：最外年輪（360 mg） 状態：wet 砂は要除去	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1N，塩酸：1.2N） サルフィックス

表 2 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1 \sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1 \sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-11729	-26.93 \pm 0.17	3853 \pm 25	3855 \pm 25	2434BC (4.8%) 2422BC 2404BC (11.2%) 2379BC 2349BC (42.9%) 2282BC 2249BC (7.5%) 2232BC 2218BC (1.8%) 2213BC	2460BC (79.9%) 2274BC 2256BC (15.5%) 2208BC

代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.0 (較正曲線データ: INTCAL04) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

4. 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

2σ (94.5% の確率) の暦年代範囲 (calBC) に注目してまとめる。自然木の暦年代は 2460-2274 calBC (79.9%)、2256-2208 (15.5%) の年代範囲であった。測定試料は木材の最外年輪部分であったため、木材の枯死年代を示している。

この年代を関東地方で測定された土器付着炭化物の測定例と比較すると、縄文時代後期初頭称名寺 2 式期を中心とした年代範囲であった (小林, 2006)。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.
- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.
- 小林謙一 (2006) 関東地方縄文時代後期の実年代. 考古学と自然科学, 54, 13-33.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代. 3-20.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.

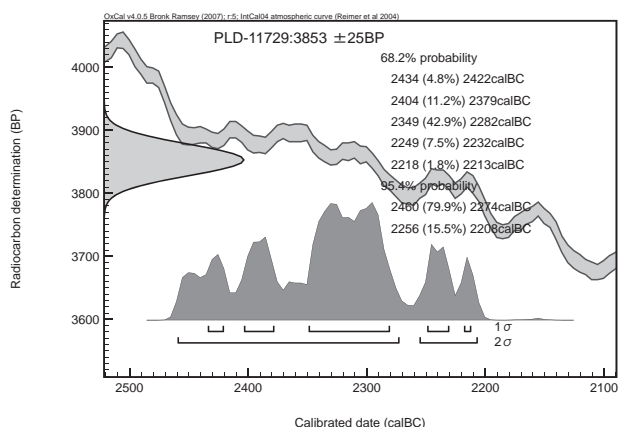


図1 暦年較正結果

付編 2

自然木・炭化材樹種同定

小林克也 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

ここでは、森下遺跡第2次調査出土の地表下約5mから出土した樹皮付きの自然木1点と、SJ01出土炭化材1点の樹種同定を行った。自然木の時期は放射性炭素年代測定の結果、縄文時代後期初頭で、SJ01出土炭化材は古墳時代前期の竪穴建物跡の建築材と考えられている。今回は、それらの樹種同定を行い、材利用について検討した。

2. 試料と方法

生材と炭化材では、同定の手順が異なる。生材の同定は、材より直接切片を採取し、光学顕微鏡下で観察し、炭化材は材の割断面を作製して走査型電子顕微鏡下で観察を行った。その後現生標本と対比して同定を行った。以下にそれぞれの詳細な手順を示す。

生材の切片採取では、木材から直接片刃の剃刀を用いて材の横断面(木口)・接線断面(板目)・放射断面(柃目)の3断面を採取し、ガムクロラルで封入し永久プレパラートを作製した。そのプレパラートを光学顕微鏡下40~400倍で検鏡した。

炭化材の試料は3断面を5mm角程度の大きさに整形したあと、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し試料台を作製した。この後、試料台を乾燥させ、金蒸着を施し走査型電子顕微鏡で撮影を行った。

なお、同定を行なったプレパラートおよび残りの炭化材は深谷市教育委員会に保管されている。

3. 結果

今回の同定の結果、自然木はクリ、炭化材はタブノキ属であった。

以下に、同定された材の特徴を記し、図版に1分類群1点の光学顕微鏡写真と走査型電子顕微鏡写真を示

す。

(1)クリ *Castanea crenata* sieb. et Zucc. ブナ科
図版1 1a-1c

大型の道管が年輪の始めに数列で並び、孔圏外では径を減じた道管が緩やかな火炎状に配列する環孔材である。放射組織は同性単列である。道管の穿孔は単穿孔である。

クリは北海道の石狩、日高以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で耐朽性が高い。

(2)タブノキ属 *Machilus* クスノキ科 図版1 2a-2c

比較的小型の道管が単独ないし2、3個不規則に複合して散在する散孔材。道管は単穿孔を有し、放射組織は同性で1~4列になる。放射組織の一部には油細胞となり膨らんでいるものが見られる。

タブノキ属にはタブノキ、アオガシなどがあり常緑高木の広葉樹である。日本の照葉樹林を代表する木の一つで、代表的なタブノキの材はやや軽軟で切削加工は困難でないが、割裂性が小さい。

4. 考察

同定の結果、縄文時代後期初頭の自然木はクリであった。縄文集落の周辺では、人間の植生改変によってクリ林が成立し、管理されていたことが示唆されている(鈴木・能城, 1997)。今回は自然木で数が少ないため不明であった。

SJ01出土炭化材は、古墳時代前期の竪穴建物の建築材である。近接した遺跡の建物跡の同定例は確認できないが、9世紀初頭~9世紀後半の深谷市の幡羅遺跡の正倉、SB32出土炭化材ではクリが最も多く検出され、様相が異なっていた(植田, 2007)。前述のとおり、タブノキ属は照葉樹林を構成する代表的な樹木の一つである。現生の自然植生としても認められる樹木で、

埼玉平野の丘陵・台地・自然堤防上の傾斜地などに点々と分布している（環境庁，1987）。本遺跡では、自然植生として遺跡周辺で育成していたタブノキを、建築材として利用された可能性が考えられる。

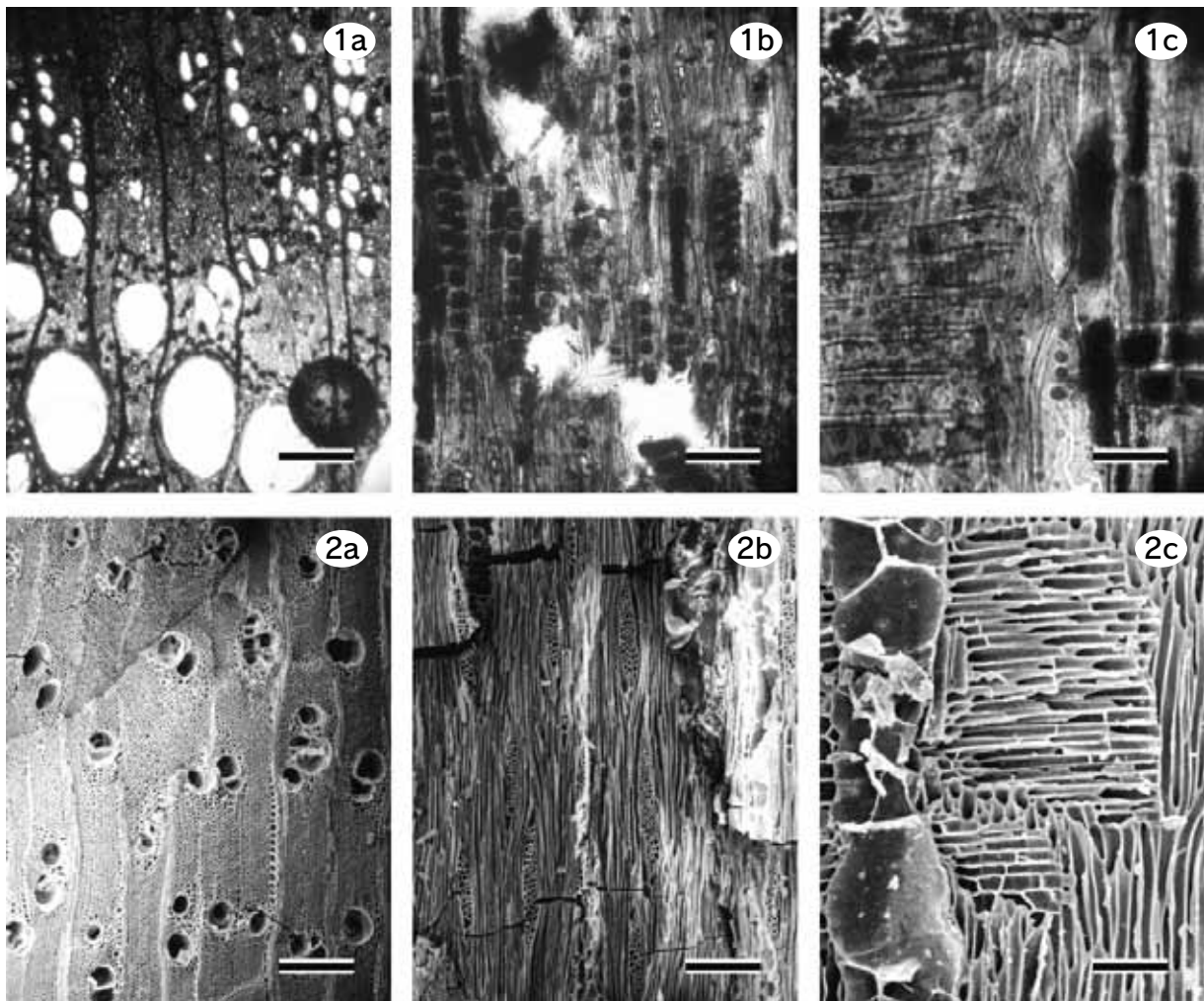
引用文献

植田弥生（2007）第32号建物跡南から出土した炭化

材の樹種同定．深谷市教育委員会編「幡羅遺跡Ⅱ - 正倉跡の調査(2)」：119-122，深谷市教育委員会．

環境庁（1987）環境庁自然保護局植生調査報告書（埼玉県）173p.

鈴木三男・能城修一（1997）縄文時代の森林植生の復元と木材資源の利用．第四紀研究，36, 329-342.

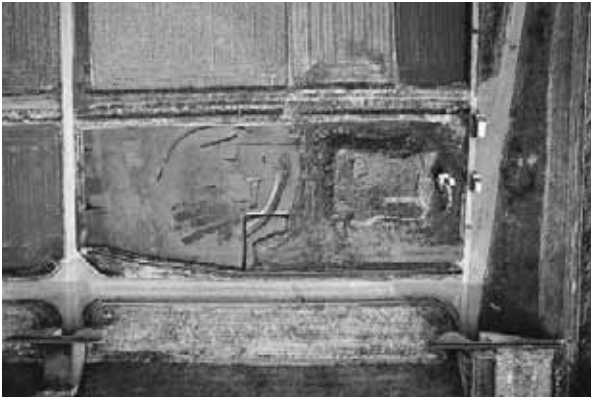


図版1 森下遺跡出土木材の光学・走査型電子顕微鏡写真

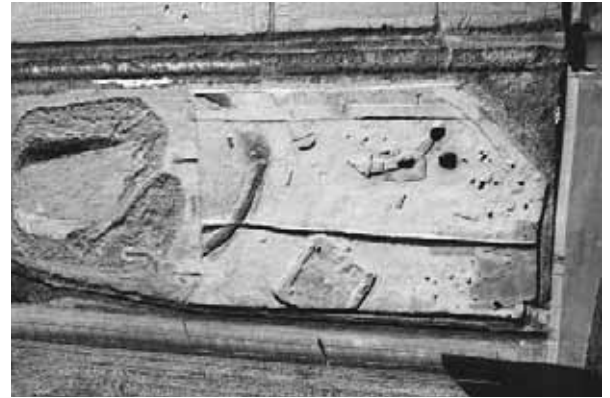
1a-1c. クリ 2a-2c. タブノキ属

a : 横断面 (スケール= 200 μ m) b : 放射断面 (スケール= 100 μ m) c : 接線断面 (スケール= 50 μ m)

写真図版



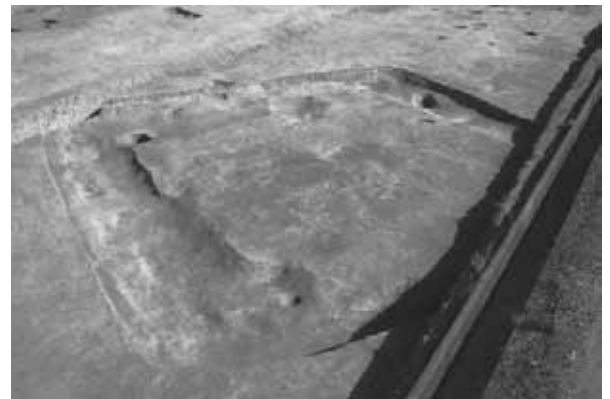
調査区西半



調査区東半



第1号竖穴建物跡(1)



第1号竖穴建物跡(2)



第1号竖穴建物跡(3)



第1号竖穴建物跡遺物出土状況



第1号竖穴建物跡炉跡



調査風景

图版 2



第2号竖穴建物跡



第2号竖穴建物跡遺物出土状況 (1)



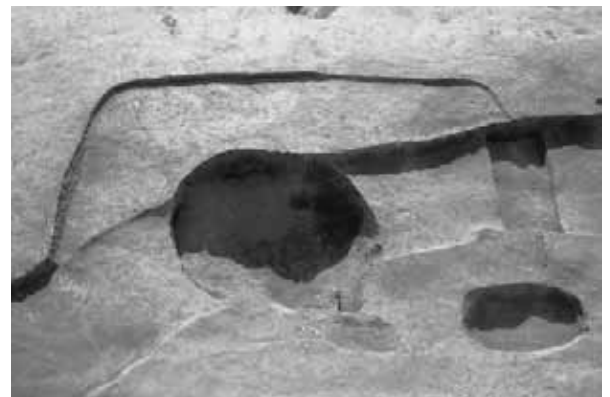
第2号竖穴建物跡遺物出土状況 (2)



第2号竖穴建物跡 P 1 遺物出土状況



第3号竖穴建物跡



第4号竖穴建物跡



第4号竖穴建物跡遺物出土状況 (1)



第4号竖穴建物跡遺物出土状況 (2)



第5・6号竖穴建物跡



第5号竖穴建物跡



第5号竖穴建物跡遺物出土状况(1)



第5号竖穴建物跡遺物出土状况(2)



第5号竖穴建物跡遺物出土状况(3)



第5号竖穴建物跡遺物出土状况(4)



第6号竖穴建物跡



第7号竖穴建物跡、第1号特殊遺構

图版4



第1号古墳跡 (1)



第1号古墳跡 (2)



第2号古墳跡



第2号古墳跡遺物出土狀況 (1)



第2号古墳跡遺物出土狀況 (2)



第2号古墳跡遺物出土狀況 (3)

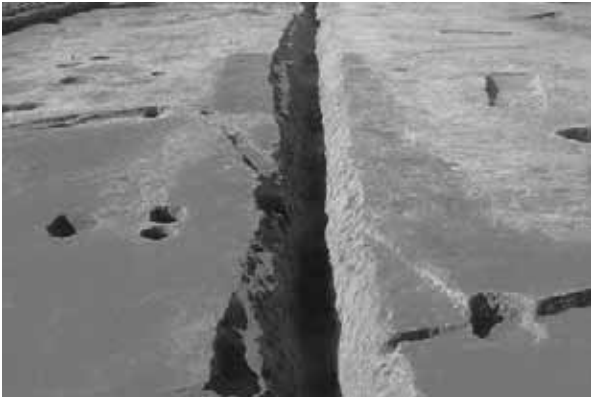


第1号埴輪棺墓 (1)



第1号埴輪棺墓 (2)

図版5



第1号溝



第1号溝土層断面(1)



第1号溝土層断面(2)



道路拡幅部トレンチ



第2号溝



第1号土坑

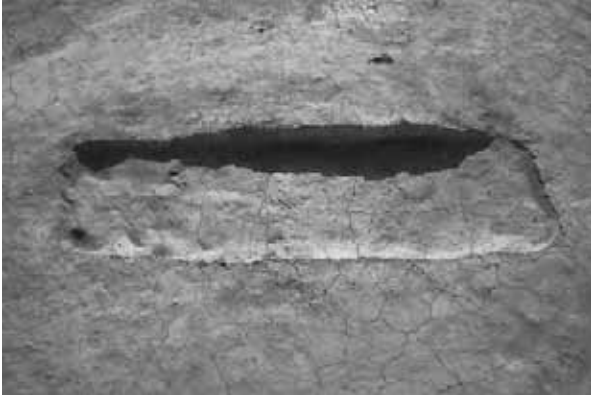


第2号土坑



第3号土坑

图版6



第4号土坑



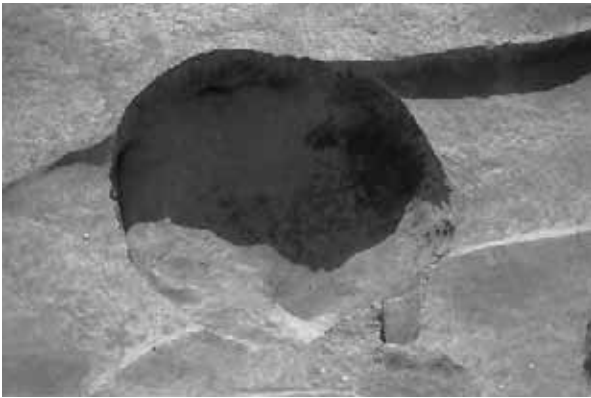
第5号土坑



第6号土坑



第7号土坑



第8号土坑



第9号土坑



第10号土坑



流木出土状况

图版 7



第7图1 (S J 1)



第7图2 (S J 1)



第7图4 (S J 1)



第7图5 (S J 1)



第7图6 (S J 1)



第7图8 (S J 1)



第7图11 (S J 1)



第7图12上半 (S J 1)



第7图13 (S J 1)



第7图12下半 (S J 1)

图版 8



第8图14 (S J 1)



第8图15 (S J 1)



第8图29 (S J 1)



第8图30 (S J 1)



第10图1 (S J 2)



第13图1 (S J 4)



第13图2 (S J 4)



第13图3 (S J 4)



第13图4 (S J 4)



第13图5 (S J 4)



第13图7 (S J 4)



第16图3 (S J 5)



第16图6 (S J 5)



第16图7 (S J 5)



第16图9 (S J 5)



第16图10 (S J 5)



第16图11 (S J 5)



第16图12 (S J 5)



第16图13 (S J 5)

图版 10



第 17 图 14 (S J 5)



第 17 图 15 (S J 5)



第 17 图 16 (S J 5)



管玉 (S J 2)、勾玉・石製模造品 (S J 5)



第 1 号古墳跡出土埴輪



第 26 图 1 (S T 2)



第 26 图 3 (S T 2)



第 26 图 4 (S T 2)



第 26 图 5 (S T 2)



第 26 图 7 (S T 2)



第 26 图 10 (S T 2)



第 26 图 11 (S T 2)



第 26 图 15 (S T 2)



第 26 图 16 (S T 2)



第 26 图 17 (S T 2)



第 26 图 18 (S T 2)



第 26 图 19 (S T 2)



第 26 图 20 (S T 2)



第 26 图 21 (S T 2)



第 26 图 22 (S T 2)



第 26 图 23 (S T 2)



第 26 图 24 (S T 2)



第 26 图 25 (S T 2)



第 26 图 26 (S T 2)



第 27 图 31 (S T 2)



第 27 图 34 (S T 2)



第 34 图 6 (S D 2)

図版 12



第 27 図 28 (S T 2)



第 29 図 1 (S H 1)



第 29 図 2 (S H 1)



第 30 図 3 (S H 1)



第 37 図 8 (S K 9)



第 39 図 1 (ピット)



第 39 図 4 (ピット)



第 39 図 2 (ピット)

報告書抄録

ふりがな	もりしたいせき (だい2じ)							
書名	森下遺跡 (第2次)							
副書名								
巻次								
シリーズ名	埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第103集							
編著者名	知久裕昭							
編集機関	深谷市教育委員会							
所在地	〒366-0823 埼玉県深谷市本住町17-3 TEL 048-572-9581							
発行年月日	2009(平成21)年1月30日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 (° ' ")	東経 (° ' ")	調査 期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡					
もりしたいせき 森下遺跡	ふかや しじょうしきめん 深谷市上敷免 あざもりした 字森下1053番1	11218	251	36 21 19	139 28 94	20070918 ~ 20071226	1900 m ²	集落排水 処理施設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
森下遺跡	集落跡	古墳時代前期 ~ 平安時代	竪穴建物跡 7棟 特殊遺構 1基 古墳跡 2基 埴輪棺墓 1基 溝 5条 土坑 10基 河川跡 1条		石器 土師器 須恵器 埴輪			

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第103集

森下遺跡（第2次）

印刷 平成21年1月26日

発行 平成21年1月30日

発行 埼玉県深谷市教育委員会
